スピンオフSS《とある西多摩の学園都市》

暮灘雪夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
スピンオフＳＳ《とある西多摩の学園都市》

【Ｎコード】
Ｎ９００６Ｔ

【作者名】
暮灘雪夜

【あらすじ】
皆様、初めましてｍ（＿＿）ｍ

【とある西多摩の学園都市（通称”西多摩”）】の作者、暮灘雪夜という者です（＿＿）

実は暮灘、【バカテス】を題材にしたＳＳ、【バカと努力っ娘と四

角形（通称”バカ努力”）】というＳＳを書いてまして、この【バカ努力】が、実は【とある】シリーズとの【実質的にクロス物】となっています。

この作品の舞台となる【西多摩先端研究学園都市】は、そんな【バカ努力世界（平行世界）】の【学園都市】という扱いになっております。

故に、【とある西多摩の学園都市】は、【バカ努力のスピンオフ作品】という立ち位置にある作品です。

その為、【バカテス】キャラは一切、出てきませんが、純粋な意味での【とある】シリーズの二次創作とは言えません。

また、”ネタの多重クロス”作品であり、例えば【緋弾のアリア】等、様々な作品がエッセンスとして、入り乱れます。

このような異色の作風ですので、もしお気に召さない要素があるなら、ターンバックを推奨致します（＿＿）

しかし、【そんな変わり種も面白い】と思う読者様がいらっしゃるなら、作者もとても嬉しく思いますｍ（＿＿）ｍ

追伸

浜面ファンの読者様には、大変に残念な展開となってる事を、ご了承ください（＿＿）

《体験版》：とある俺と命（みこと）の日常生活【ある程度のネタバレ注意です】

皆様、こんにちは☆
もしくは、はじめましてｍ（＿＿）ｍ
暮灘雪夜と申します（＿＿）

今回、投稿する【《体験版》とある俺と命（みこと）の日常生活】は、以前、暮灘の【バカと努力っ娘と四角形☆えくすとら！】内に投稿した、バカ努力ＳＳ：【とある西多摩の学園都市】　第０話【俺と命（みこと）と賑やかな仲間達…仲間、だよな？】を、そのままコピーした物です。

基本的には、【とある西多摩の学園都市】の世界観を説明したり、登場人物や人間関係の説明を、いわば【小説仕立て】にした物で、また、【西多摩】の一応のゴールを本編に出てくる【シスターズ事件】に定めているので、基本的にはこの《体験版》は、本編の【後日譚】…というより、【こんな平和な日々が来ればいいな～】という作者の願望を凝縮した作品となっております。

【西多摩先端研究学園都市を舞台にした物語】のイメージを掴む為の【試供品（パイロット版）】程度に思って頂ければ、嬉しく思います（＿＿）

また、地名だけでなく人名等も、【読みが同じで漢字が変わって】いたり、【漢字は同じで読みが変わって】いたり、また【名前が一部変わっていたり】するのは、ここが、【原作と異なる世界（平行世界）】故に、運命や因果律が異なる…その象徴だと思って頂ければ（^__^;）？

それでは、かなり風変わりな物語だと思いますが、楽しんで頂ければ幸いです（__）

西多摩先端研究学園都市

東京西部にある学生と研究者…様々な科学者、錬金術師、魔導師（魔法使い）が集まり、常に【科学、魔法、錬金を有機的に融合させ、その複合先端分野を日本の産業に反映させ、祖国を繁栄させる】事を目的とした街である。

そのような場所柄だからこそ、【魔法と科学と錬金術の先端研究者を集まってるのだ。

なら、折角だから新ジャンルの《超能力》の研究でもしてみようじゃないか？】と、超能力の研究が始められたのは、別段、不思議な事ではない。

その運営に出資してるのは公的機関なら、科学技術省を筆頭に、厚生省や文部省、通産省に国防省等々幾多の関係省庁に、宇宙開発公団などの公団や公社も名を連ねている。

つまり、何が言いたいかと言うと、西多摩先端研究学園都市、通称【西多摩】は、地外法権などではなく、ちゃーんと日本の領土であり、場所柄の特例や例外はあっても、日本の法律の適応範囲って事だ。

間違っても…

「ロシアと単独戦争だァァァーーーッ！　ヒャッハァァァーーーッ！！」

ってノリは、有り得ない。
そういう意味じゃあどこぞの平行世界（笑）の【学園都市】よりは、遥かに安全性は高い。
精々居るのは…

「日本のォォォーーーッ！　科学力はァァァーーーッ！！　世界一ィィィーーーッ！！！」

って科学者がいたり、

「実験実験実験実験ッ！！　この世界の謎を解きっ！！　神が残したもうた暗号を解読し、真理を探求する事が我々の使命なのですっ！！」

なんて錬金術師がいたり、

「魔法を妄（みだ）りに使ってはいけませーん。魔法の実験材料にしていいのは、化物と異教徒だけデース…エイメン！！」

って、魔導師がいたりと…

……

……あんま、安全性高くないかも（笑）

特に最後の奴、ローマ系の十字教徒だろ、絶対っ！？

まぁ、そんな危険人物達は、放っておいて、

（幸せだ…）

と、わたくし【上条刀磨（かみじょう・とうま）】は、つくづく幸せを噛み締めてる訳でして。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

子供の頃の夢は、色褪せない落書きなんて歌があったけどさ、子供の頃の夢って、本当にとりとめないよな？

やれ、パイロットになりたいとか、宇宙飛行士になりたいとかさ？

俺の【腐れ縁（しんゆう）】なんざ、【正義の味方】って書いてたしな。

（そう考えれば、俺は夢の無いガキだったなぁ…）

なんせ、小学校時代の作文に…

【しあわせになりたい】

って書いたっけ…（泣）

どういう訳か、ガキの頃から俺は、運が無かったんだよ。

いっつも有り得ない事ばかりに、巻き込まれてさ…

んで、俺の【不幸体質】に巻き込まれたくないって、友達も作りづらくて…

（でも、【アイツ】だけは、違ったよな…）

ああっ、さっき言ってた【腐れ縁（しんゆう）】の事さ。

アイツも何だかガキの頃に、【向きを操作する力】だか何だかって、とんでもない【能力（ちから）】持ってたせいで孤立しがちで、

（でも、俺にはどういう訳か、力が通用しなかったからなぁ…）

でもさ、アイツとの出会い自体は悪くはないけどさ、少なくとも最初だけは、立派に不幸だったと思うぜ？

だってさぁ…

（何が哀しくて、小学生同士が、ガチの殺し合いをやらねばならな

いのでせうかっ！？）

まぁ、それでも何とか【ともだち】って奴になって、アイツの暴走を俺が打ち消し、時折、拳でツッコミ入れたりしてるうちに【腐れ縁】になったりと、中々有意義ではあったんだけど、【不幸】ってのは、中々消えてくれないもんでして…

（クライマックスは、中三の時だったなぁ…）

いや、流石の上条さんも、

（非合法工作専門の非公開政府機関の【濡れ仕事】の現場を目撃するとは、思いませんでしたよっ！）

ちなみに【濡れ仕事】ってのは、【えっちな仕事】って意味じゃなくて、【血生臭い仕事】って意味で、ぶっちゃけ暗殺とかなんよ。

俺が目撃したのも、そんな現場。

（相手が魔術師や錬金術師とかなら何とかなったかもしれないけど…【ちょっとした切札】ならあったしな）

本格的な高度戦闘訓練を受けて、尚且つ実戦経験豊富な、オマケに物理兵器で武装した一個分隊（９人編成）には、手も足も出ませんでした（泣）

でも、本来なら【現場処分】されてもおかしくないシチュエーションだったんだけど、俺をうっかり現場に入れてしまった負い目があったのか、連中の親玉…【全身黒づくめで、顔の上半分を尖ったバイザーで隠し、マントを羽織った、俺と同じ黒髪のツンツン頭のテレポーター（？）】の隊長に、こう言われたんでせうよ。

『喜べ。君には、選択肢がある。一つは記憶消去。もう一つは、俺達の【身内】になるかだ』

上条さんが選んだのは、後者だった。

その【ガッチャマンもどき】の現場隊長に言わせれば、【現場目撃の情報だけ】を消去する事は、可能だったらしいんだけど…

（なんか、嫌な予感がしたんだよなぁ…）

上手くは言えないんだけど、処理に失敗して【脳味噌に直接、スタンガンを押し付けて、脳細胞を殺した】ような状態で、記憶が全部パーになるような…そんな、有り得ない状態が、待ってるような気がしてさ…

まぁ、そんな事情で、俺は【政府の暗部や裏側と関わりのある人間】

と悟られないまま、とりあえず使える戦闘力を、【説得力のある方法】で手に入れる為に、受験先を急遽変更したのさ。

具体的には、東京のベイサイド・エリアにある”武装偵護官”を養成する【武偵高校】を受験したんでせうよ。

ちなみに所属していたのは、かの悪名高き【強襲科（アサルト）】…

（あの三年間、流石に何度死にかけた事か…）

思い出すだけ馬鹿馬鹿しい数だったような気が…（汗）

そして、卒業してから極秘裏に【任官】して、最初の赴任地が…

（この【西多摩先端研究学園都市】だった…）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

【西多摩】に来てからも色々あったんだけどさ…

とりあえずの驚きは、

（まさか、高校一年生からやり直しとは、思わなかったですたい！）

身分や年齢の詐称は、潜入工作の基本なれど、【普段は、普通の高校生として過ごし、裏からの西多摩の治安任務にあたれ】と言われるとは、思わなかったぜ。

でも、それはそれで、悪くない…いや、むしろラッキーだったと思う今日この頃。

何故って…

（幸せだぁ…）

冒頭に戻ってしまうんでせうが…

視界の端に見えるのは、綺麗に折り畳まれた【常盤台】の制服と、その上にちょこんと鎮座する、スッゴい控え目なサイズのブラと、二人分の体液の混合液で、洗濯以外の選択肢がないビチョビチョなぱんつ…

視線を、台所に移すと…

「ふんふんふんふ～ん♪」

鼻歌混じりに、小振りな生尻が、揺れていた！

人には、色々な夢がある…

だけど、健全な青少年の夢の一つは間違いなく、

（可愛い彼女の【裸エプロン】では、ないでせうかっ！！！）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

俺は、おもむろに立ち上がる…

いや、だって脚の付け根から溢れ出て、太股の内側を伝ってツゥ～と零れ落ちて、ルーソまで濡らしてる…なんて姿を見てたら、いくら上条さんでも、辛抱たまらんのです！

いや、その原因を作った…一緒に買い物した帰り際、あまりの愛らしさに我慢できず、途中の公園で着衣のままぽんつだけずらして一戦やらかし、散々中で放出しまくったのは、他でもない上条さんなんですが（汗）

俺は、その料理に勤しむ少女の後ろに立つと、

「ひゃん！」

エプロンの中に両手を滑り込ませて、メチャクチャ好みの手の平にすっぽり収まるスモールな膨らみを揉みながら、先端をいじったりなんかしちゃったりして、甘い声を上げさせるのであった。

「とうまぁ…今、包丁使ってるから危ないよぉ…」

もう感じ始めてるのか、顔を真っ赤にしながら、どことなく声を上擦らせる彼女に、

「”みこと”が可愛い過ぎるのが、悪いんだ」

と、耳たぶを噛みながら囁いた。

彼女の名前は、【御坂命（みさか・みこと）】…ああっ、命と書いても、触角みたいな髪型でファイナル・フュージョンを承認したりしないぞ？

髪型は、歳相応のショートの茶髪、名門お嬢様学校の【常盤台】の学生で、学園都市でも片手の指の数程しかいない【レベル5】の能力者…いわゆる【超能力者】だ。

とはいえ、上条さんにとっては、常に愛らしい【女の子】の”みこと”でしかないんですが（笑）

出会いは特筆すべきようなもんはなかったんだけど、やっぱり付き合う切っ掛けになったのは…

（みことの【シスターズ】事件だったよな～）

【シスターズ事件】って言うのは、簡単に言えば、

幼い頃の命を騙して抜き取った遺伝子地図を元に培養したクローン体（シスターズ）を、戦闘触媒…”イケニエ”にして【レベル５能力者】を、【レベル６】に人工進化させちゃおう。キラッ☆

なんてフザケタ計画だったんだが、勿論、そんなグレーゾーンどころかダークゾーンど真ん中の計画が上手くいく筈もなく、【１ｓｔロットの２００人】の製造途中（幼体状態）にあえなく当局に察知され、俺や命、繋がりを持った垣根なんかの他の能力者や、ジャッジメント等々の総攻撃を食らい、【西多摩始まって以来の大粛正】が行われ、計画は物理的にも壊滅…って、顛末だったんだ。

（吊り橋効果って奴かな…？）

多分、そんな心理も関係してると思うんだけど、それは別段どうでもいい。

みことは、元々俺のストライク・ゾーンだったし…

（それに、あの事件以来、性格も甘久になったし…）

何故だかよくチームを組む事が多い悪友にして級友、【ネセサリウ

ス（必要悪の教会）】所属の陰陽師で、妹と熱愛中でとっくの昔に一線越えてるという、よくわからん立ち位置にいる土御門（つちみかど）によれば、

『デレ期の《いいなりモード》に突入したんだにゃー』

であるらしい。

（とゆーか、やっぱりよく分からん）

世の中、上条さんが知らない言葉も多いと確認した所で、

「みこと…包丁を置いて手をついて、そのまま足を開くんだ」

みことは、正気が押し潰されたトロンと蕩けた瞳で、

「うん♪　とうまぁ…”みこと”はね、とうまの言うこと、何でもきくよ？　だから、みことで、いっぱい遊んでぇ…」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

さてさて、みことととみことお手製の昼飯を食べ終えて、胡座をかいた膝の上に乗っける感じでみことを連結（笑）しながらイチャイチャしてると…

”ＲＲＲ…ＲＲＲ…”

と、無粋に鳴る携帯の着信。

いっそ、切ってやろうかとも思ったが、発信者を見て思い止まる。

俺は、電話をとると、

「どったんだよ”カザリン”？　今、みことと良いとこなんだけど？」

すると、電話主は、

『誰が”カザリン”ですかっ！　わたしは”飾利（かざり）”です！　”初春（ういはる）飾利”！　いい加減に覚えてくださいよっ！」

あ～、はいはい。

「わかったわかった、【平沢唯】」

『誰ですかっ！？　そんな事を言ったら、佐天さんは【エルシー】じゃないですかっ！』

実はお前、ネタわかってるだろ？

「んで、どうしたんだよ？　【イカ娘】でも侵略してきたか？」

『そんな可愛げのある物だったら、誰かに報せる前にゲットしてお持ち帰りします！』

なんか、妙な覚悟を言った後、電話がどうやらマイク音声に切り替わり、

『おうらァッ！　さっさと出てこねェと、建物ごとミンチにしちまゥぜェ！！』

『ミサカは、それが一番効率的だと”お兄ちゃん”に進言します』

『ミサカは、既に包囲殲滅の準備が出来たと”お兄様”に報告します』

『”局長”！　駄目ッスよ！　生け捕りが、基本ですって！』

何となく、状況を把握。

（なるほどね…）

アイツが…

【西多摩】で再会したら、”ジャッジメント（秩序を守る抑止力）”になってた【腐れ縁（しんゆう）】が、今日も元気に暴れてるって訳ね（笑）

「んで、俺に【一方通行（いっぽうつうこう）】を止めろと？」

『出来れば、殺りすぎようとした時、ツッコミを入れて貰えれば』

やれやれだぜ。

本当に、

「退屈しないぜ…！！」

《体験版》：とある俺と命（みこと）の日常生活【ある程度のネタバレ注意です】

皆様、ご愛読ありがとうございましたm（__）m

はじめましての【バカテス】ジャンル以外への投稿に、内心は読者様の反応にドキドキな暮灘です（^^；？

かなり風変わり、変わり種、異質な作品に感じられたとは思いますが、皆様、楽しんで頂けたでしょうか？（^^；？

前書きにも書きましたが、この《体験版》は【一応のゴール地点】であり、辿り着きたい場所でもあります。

次回は、本編の【プロローグ】であり、”武偵”高校卒業生としての【上条刀摩】を描きたいと思っています（^__^；）？

ご意見ご感想は、作者と作品の日々の糧☆

いつでもお待ちしております（__）

プロローグ：とある刀磨（とうま）の卒業式（前書き）

皆様、こんにちはー☆

連続投稿の暮灘です（＾＾；？

読者様の反応もない内から連続投稿はどうかと思いますが、流石に以前投稿した作品を、まえがき&あとがき変えただけの作品でお茶を濁すのは、不義理というもの（汗）

という訳で、今回は《体験版》のあとがきで予告したように、【”とうま”の武偵高校卒業生】としての卒業式を描いてみました（＾—＾；）？

しょっぱなから、【とある】シリーズとは全く違う作品（笑）とクロスしてますが、それが【とある西多摩の学園都市】の仕様…他作品のキャラと上条さんが戯れる（確か、そんなゲームがありましたよね？）思い切り遊びの要素だと思って頂くと、暮灘としてもありがたいです（＾＾；？

今回のエピソードのコンセプトは、

二人の”かみじょう・とうま”が…

上条当麻と上条刀摩が、【別の宿命や宿業】を持っている事を、明

確に描けたらなぁ～と思っています（^＿^；）？

それでは、原作では有り得ない、【過去と戦闘力の根拠】を持つ”とうま”を、お楽しみください（＿）

プロローグ：とある刀磨（とうま）の卒業式

世界は、幾多に存在する。

【エヴェレットの多世界解釈】を論ずるまでもなく、世界は幾多の可能性に満ちていて、また可能性…分岐の数だけ、異世界…【平行世界】は、存在する。

とある世界、【第三次世界大戦】と呼ばれる戦いの最中、一人の少年…【幻想殺し】という力を持つ少年が、ロシアの大地に姿を消した…

また、その少年の喪失を知ったとある少女は、呆然自失のふらふらとした足取りで、雑踏の中に消えていった…

それは、紛れもない悲劇…

恐らくそれは、【その世界】では、避けきれなかった悲劇…

しかし、世界は幾多の可能性に満ちている。

ならば、別の可能性を、因果律を持つ【げんそうごろし】の少年…
【かみじょう・とうま】がいても…

あるいは、別の可能性や因果律を持つ【電磁波使い】の【みさか・みこと】がいても…

そんな二人がいても、いいんじゃないのだろうか？

例えばこれは、そんな物語…

【読みが同じで漢字が違う者】…

【漢字が同じで読みが違う者】…

【名前が、ほんの少しだけ違う者…】

それらは全て、【とある世界】と、因果の変化を受けた証…

これより皆様は、読者であると同時に、【観測者】になる。

即ち、【とある世界】を、【その結末】を知る皆様だからこそ、この【異なる因果律を持つ世界】の観測者と成り得るのだ…

さぁ、幕開けです！！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

東京、ベイサイド・エリア、【武偵高校】

武偵高校とは、言うまでもなく武偵…【武装偵護官】即ち、【警護対象の安全確保の為、武装を許可されると同時に、積極的な捜査及び逮捕を可能】とする人材を養成する機関である。

武偵は別名、【ＣＣＶ（カウンター・クライム・ヴァンガード：対犯罪先兵）】とも呼ばれ、対犯罪者の最前線に立つことも多い。

逆に言えば、それだけ犯罪者との戦う機会が多い。

当然、命の危険も高く…

（特に我が【強襲科（アサルト）】に至っては、入学した生徒の１００人に三人は、卒業前に顔写真に黒いリボンが巻かれる…ってか）

だから、卒業式のめでたさは、生き残ったという実感コミで、普通の高校の比じゃないってのは、分かるんだけどさ…

（だからといって…）

卒業式が終わった後、講堂を出た俺こと、上条刀摩（かみじょう・とうま）を待っていたのは…

「なんだって全校全学科総出で、上条さんを送り出してるんでせうかっ！！？」

校舎全体にかかった

【さようなら！　上条先輩！！】

の横断幕。

車両科のクラクション演奏（？）に、探偵科の合唱に、古巣の強襲科からは、【祝砲（空砲射撃）】の乱れ撃ちって（汗）

「上条先輩…」

唖然としてた俺に声をかけてきたのは、

「キンジ（金二）か。どうした？」

右側に黒髪で巫女服の美少女、左側に金髪でフリフリの改造制服の美少女を従えた二枚目だ。

名前は、【遠山金二（とおやま・きんじ）】。

同じく【強襲科】の1年、つまり後輩だ。

「卒業、おめでとうございます！！」

ペコリと殊勝に頭を下げるキンジ。

「本当に、先輩には…無茶苦茶お世話になって…」

ちなみに、大した世話をした覚えは、上条さん的には、ありゃしません。

ただちょっと、キンジの殉職した兄さんが【不条理なスケープ・ゴート】にされた際、【拳の説教】で渇を入れたのと、

（【訴訟を恐れて、遠山兄をスケープ・ゴートに仕立てたクルージング会社の内部資料】を、チョイとばら蒔いただけなんだけどな…）

まぁ、暇そうな連中に声をかけて仕上げた【卒業制作】みたいなもんだ。

【浦賀沖海難事故】の時の【マスゴミ】どもの対応には、ブチ切れてた奴も武偵高じゃ多かったから、必要なメンバーを集めるのも楽だった。

（それにしても、あれは痛快だったなぁ～）

遠山兄を【悪党】に仕立てたクルージング・イベント会社の重役と、

マスゴミの【受け皿】をちょこっと拐って、鼻っ柱と前歯に拳叩きこんで、裸にひん剥いて真冬のレインボーブリッジから逆さ吊りにしたら、またよく喋るよく喋る（苦笑）

それを、複数の某有名巨大動画サイトにリアルタイム中継したら、記録的な数字を叩き出したっけ。

まぁ、マスゴミの面子は潰せたし、遠山兄の名誉は回復できたし、上条さん的には結果は上々ってなもんですよ。

「前にも言ったけど、上条さん並びにその一派は、武偵にケンカ売った連中に、【意趣返し】しただけですから、キンジが礼をするには、及ばないってもんですよ？」

と、軽く手をヒラヒラさせてみると、

「でも、先輩がいなければ、俺は今頃、【強襲科】に…いや、武偵高校自体に居なかったと思います…」

若いね～と思いはするけど、

「武偵憲章第1条【仲間を信じ、仲間を助けよ】…」

俺が【武偵高校】で聞いた言葉の中で、一番好きな言葉だ。

何度死にかけても、俺が最後まで武偵高にかじりついてたのは、多分、この言葉が好きだったからだ。

「直接、面識はねぇけどさ…遠山兄だって武偵だろ？　んじゃあ、俺達の仲間じゃん。だったら、助ける…命が駄目でも、せめて【生きた時間】を助けるのは、当然じゃねーの？」

大体、死人の名誉は守るべきもんで、死体に唾を吐きかける行為ってのは、見てて腸煮えくりかえるしな。

「先輩…」

いや、だからそんな人を【聖人】でも見るような目で見られても（汗）

「あ～、それにお前さんの【心】を救ったのは、俺じゃなくて、左右を固める美少女二人でせうが？」

と、俺はキンジの左右をガッチリ固める長い黒髪と、ウェーブがかった金髪という、巫女服と改造フリフリ制服の対照的、でも間違いなく美少女の二人を交互に見る。

「び、美少女なんて上条先輩ったら…（照）」

「きゃははっ♪　トーマ先輩の正直者～☆」

リアクションまで好対称とは、恐れ入るね～。

あっ、そうそう。

言い忘れてたけど、キンジの右側にいる黒髪ストレートの巫女さんは、【星伽白雪】。一般的（？）な言い方をすれば、【東洋魔術師】

で、金髪ふわふわヘアーは、【峰理子】。正確には、【理子・峰・リュパン4世】。一応、レベル2だか3だかの【念動力使い（サイコキネ）】だ。

さしずめ、二人揃って”キンジの親衛隊”ってとこか？

「上条先輩、卒業おめでとうございます」

と、日本の古式ゆかしい礼儀作法に基づいた丁寧なお辞儀をする白雪…

「私からも感謝をさせてください。先輩が背中を押してくれたから…」

白雪は、にっこり微笑むと、

「キンちゃんの、立派な【雌奴隷】になれました♪」

さらっと爆弾発言してくれる白雪に、

「ちょっと白雪！　自分だけが、キーくんの【雌奴隷】って言い方やめてよぉ～。理子だって、立派なキーくんの【雌奴隷】なんですからねぇ～だっ！」

と、アッカンベーをしながら食ってかかる理子。

いや、上条さん的には、年頃のおにゃのこが、昼間っから【雌奴隷】って単語を連呼するのは、いかがなものかと…（汗）

「縄で縛られる方が、愛がありますっ！」

「ボンテの方が、きゃわいいだもんね～だ☆」

そっか、そっちの趣味も和洋でしっかり別れてるってわけね…

（って、感心してどーするっ！？）

いや、上条さん的には、どうリアクションしたら、いいんでせう？

兄の死と、心ないマスゴミの攻勢で傷付いたキンジを何とかしたいって思ってた、白雪や理子の背中を押したのは、確かに俺なんだけどさ…

（何をどう勘違いしたのか、【肢体（からだ）を使って、ご奉仕プレイで慰める】なんて、ど真ん中ストレートな方法をとるとは、流石の上条さんも予想の斜め上でした）

まぁ、本人達が納得づく…というか、願望全開みたいだから、いいんだけどさ。

（それにしても、こいつらとは、何かと縁があったな～…）

【浦賀沖海難事故】だけじゃなくて、白雪狙った【摩剣使い（デュランダル）】が出てきたり、理子のストーカーの【吸血鬼（ブラドー）】が出てきたりとか…

ああ、勿論、活躍タイムはキンジに熨斗(のし)つけて進呈しましたよ？

上条さんは、裏方に徹しましたし（笑）

（とりあえず、フォローでも入れておきますかねぇ～）

「白雪と理子のお陰で、キンジも【万年ヒステリア・モード】になれんだから、感謝しとけよ？」

【ヒステリア・モード】ってのは、正確には【ヒステリア・サヴァン・シンドローム（ＨＳＳ）】って言って…

って、説明すっと長くなるから、とりあえず【キンジがエロい気分になった時に発動する”ハイパー・モード”】って思ってくれりゃいいや。

聞いた話によると、授業中も二人が左右からベッタリ貼り付いて、常にご奉仕（笑）したり、昼休みには三人揃って姿を消して、キンジはやや疲れた顔で、二人は虚ろな瞳で、脚の間からポタポタ色んな液体を垂れ流しながら教室に戻ってくるらしいから、最近のキンジは常時【ハイパー状態】だ。

「わかってます。白雪も理子も、俺の【可愛い仔猫】ですから」

「キンちゃん…」

「キーくん…」

二人が更にキンジに密着して、キンジも応えて抱き締める姿は、むしろ微笑ましいと言いますか…

「羨ましいですなぁ～。モテた試しのない上条さんには、縁遠い光景でござんすよ♪」

”ぴしっ！”

ありゃ？

なんで、そこで三人揃って石化する？

更にどうしてジト目になるんでせうか？（汗）

「「「さすが武偵高最強の【フラグ・ブレイカー（恋愛殺し）】…恐るべし！！」」」

はい？

上条さんの右手に宿るのは、【イマジン・ブレイカー（幻想殺し）】なんですが？？？

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「んじゃあ、俺はそろそろ行くな？」

俺はポケットから、車…【ランボルギーニ・ガヤルドＬＰ５７０－４スーパーレジェーラ】のキーを取り出す。

（これ以上留まるってのは、未練だろうしな…）

なんのかんので、三年も鉄と血と硝煙の臭いがこびりついた校舎にいたんだ…

（名残惜しくないって言ったら、嘘になるわな…）

だが、用も無いのに同じ場所にいるのも、やっぱり上条さんらしくない訳でして。

「んじゃな！　運と命があったら、また会おうぜっ！！」

在学中ですら１００人中３人は、天に召される【武装偵護官】だ。

犯罪者達と地で殺り合う【着任】後ともなれば、比喩でなく、明日の朝日が拝めるか分からない。

武偵は、運が無ければ命はないし、命が無ければ次に会う事はできない。

（って、そりゃどんな皮肉だよ？）

自分で言った台詞に、俺は内心で苦笑してしまう。

幸運に武運…おおよそ【ポジティブな意味の《運》】ってのは、俺に最も縁遠い言葉なのにな。

「「「「「「ありがとうございましたっ！！！！」」」」」

後輩…いや、在校生の声を背に受け、俺は駐車場に歩き出す。

少しくすぐったいけど、

（悪くない気分だぜ…！！）

こうして、俺の武偵高校での生活は、終わりを告げた。

相棒の【スーパーレジェーラ】に乗り込み、エンジンをかける。

ＬＰ５７０の名が表すように、５７０馬力を発生するＶ型１０気筒エンジンが、背中越しに目を醒ました。

いつもならご機嫌なハイビート・サウンドも、今日はなんだか少しだけ、しっとりと奏でられてる気がする…

（俺にも、哀愁やら感傷なんて感覚が残ってる事が、驚きだよな…）

俺は、制服の懐に手を入れ、一丁のリボルバー・タイプの拳銃を引き抜く。

”相棒”の名は、スターム・ルガー社の【スーパー・レッドホーク】をカスタムした、通称【ガード・ブレイカー（防御殺し）】だ。

ノンフルーテッド・シリンダーをステイク・アウトするし、有名な44マグナム弾の以上のパワーがある【480ルガー＋P弾】が、いつもと同じく6発収められている事を、確認する。

武偵は、ガソリン車と火薬銃を好む。

電気自動車と電気銃（コイル・ガン）が主流の日本じゃ、いかにも懐古趣味だが、日本以外じゃ、主流は前者だ。

（世界のどこでも、どんな犯罪者とも殺し合う…）

それが、”武偵”だ。

そして、卒業を待つように、俺に用意されていた【任地】は…

「【西多摩先端研究学園都市】か…」

プロローグ：とある刀磨（とうま）の卒業式（後書き）

皆様、ご愛読ありがとうございましたm（__）m

新ジャンルへの連続投稿に、内心、冷や汗タラタラの暮灘です（^^；？

何となく伏線は張っていた（笑）んですが、今回は【緋弾のアリア】とのオマージュでした（^^；？

そのうち、ちゃんと設定で書こうと思うのですが、原作【緋弾のアリア】の【武偵】は、”武装探偵”の略ですが、【西多摩】では”武装偵護官〝の略で、探偵というより【護衛目的の捜査権や逮捕権を持つＳＰ】みたいな役割で、少し扱いが違います。

大きな違いは、原作アリアの武偵法９条【その武偵活動中に人を殺害してはならない】が、【可能限り犯人の生存を図る】に変更されてる事でしょうか？（^^；？

殺されない事が分かってれば、犯人はいくらでも強気になりますからね（苦笑）

あと、ちょっとしたネタですが、上条さんが【ランボルギーニ・ガ

ヤルドＬＰ５７０－４スーパーレジェーラ】に乗っているのは、アニメ版【超電磁砲】の木原せんせーが、【ランボルギーニ・ガヤルド】に乗ってた事のオマージュだったりします（；＾＿＾Ａ？

まぁ、上条さんが買ったのではなく、【押収】した証拠品を、上の許可をとって半私物としてるんですが（笑）

皆様、とりあえず体験版とプロローグを書いてみましたが、いかがだったでしょうか？（汗）

正直、作者の中では【西多摩】が、読者の皆様の中で【物語として受け入れて】いただけるのか、読者様の需要があるのか、正直、かなり不安要素があります。

今後、連載するべきかを考える参考にもしてみたいので、ご意見ご感想を頂ければ幸いですｍ（＿＿）ｍ

第1話：とあるバーテンダーの裏事情（前書き）

皆様、こんばんわー☆

なんだか、今日は微妙に忙しく、投稿の遅れた暮灘です（＾＾；？

ちょっと気分転換に、暫く【とある西多摩の学園都市】を、短期集中で書いてみようかなぁ～と（笑）

今回の読みどころは…

【バカ努力】の読書様には、どこかで見覚えのある【ラーメン屋の若店主（笑）】が出てきたり、【とある】原作シリーズで悲惨だった人が、意外な仕事をしてたりと、まぁ、オープニングっぽく色々出てきます（笑）

それにしても…女っ気少ねぇ～っ！！

最後のオマケ以外、全くおにゃのこが出てこない話になってしまいました（＾＿＾；）？

次回こそ、ヒロインを出してみたいなぁ～（汗）

まぁ、こんな相変わらずのちゃんぽんなお話ですが、楽しんで頂ければ幸いです（＿＿）

第1話：とあるバーテンダーの裏事情

とりあえず、ベイサイド・エリアから出た俺こと、上条刀摩（かみじょう・とうま）は、スーパーレジェーラの進路を、そのまま【西多摩先端研究学園都市】に向ける…べきなんだろうけど、

（とりあえず、”天河”さんのとこに顔を出しておくとしますかねぇ～）

と、日本の南北を結ぶ【銃弾】に、車を乗せる。

ああ、ちなみに【銃弾】ってのは俗称で、正式には、【日本縦断高速交通道路網】ってのが正解。

【太平洋戦争】の”停戦”がなされ、アメリカと”休戦協定”が結ばれた１９４５年に発布された【国土再建造計画】の目玉で、ドイツの【アウトバーン】を見習い、

”有事の際には、航空機の離発着に使える速度制限無しの高速道路を建造して、日本の南北を結んじゃえ”

って感じで、国土交通省と運輸省、更に国防省が音頭をとって始まった大計画。

お陰で、今は札幌や函館から福岡や長崎まで、高速道路をおりずに車でかっ飛べるって訳さ。

ちなみに、今でも道路は九州なら南に、北海道なら北に伸びてるって感じらしいぜ？

ああ、もう分かったと思うけど、【銃弾】って俗称は、【弾丸みたいにぶっ飛んで逝く】のと日本【縦断】をかけてるって事さ。

（せっかくの”銃弾”だしな…）

（スーパーレジェーラの性能は、０→１００ｋｍ／ｈまでの加速が３．４秒。最高速は、３２５ｋｍ／ｈ…）

「久しぶりに上条さんの【３００ｋｍ／ｈチャレンジ】と行きますかぁ～」

ここまで、ぶっ飛んばすんは、車輌（ロジ）科の連中と、【キャノンボール・レース】やりながら、長崎まで本場のちゃんぽんを食いに行った時以来だな～。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

（【文月学園】ねぇ…）

俺は一度、”銃弾”を降りて、ベイサイド・エリアと【西多摩】の中間より少し外れた街に、車を滑らした。

【文月学園】…確か、【魔法と科学の融合】を研究する民間研究所が前進で、今はその成果を【教育プログラム】に反映してるらしいけど…

（まぁ、研究を止めたって話は聞かないしな…）

大方、小型版【西多摩先端研究学園都市】って感じなんだろうな～と。

「まぁ、今のところ上条さんには関係ありませんってね」

そして、俺は一件のラーメン屋の前に車を止める。

【準備中】の下げ札がかかっちゃいるが…

「ちーす」

俺は、構わず【天河らーめん】と染め抜かれた赤暖簾の下を潜った。

「いらっしゃい！」

と、カウンター越しにかかる声。

どう見ても、１０代後半…俺と同年代ぐらいにしか見えないんだけど、実は四捨五入すれば確実に３０代というラーメン屋の若店主…【天河秋人（てんかわ・あきと）】こそ、上条さんを【コチラ側】に引き込んだ張本人だったりするんだな、これが。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

もう、三年以上前になるかな？

俺は今みたいに白を基調とした料理人服じゃなくて、尖ったバイザーで顔の上半分を隠し、黒づくめの姿で防弾ステルスマントを羽織った天河さんに、こう言われたんだ。

『喜べ。君には、選択肢がある。一つは記憶消去。もう一つは、俺達の【身内】になるかだ』

要約すれば、なんて事はない。

天河さんは、当時から【法で裁けぬ《抹殺対象者》を、非合法な手段で《消去》するセクション】…【書類上は、いかなる公的資料にも記載されてない政府セクション】に所属している【始末屋】だったって訳だ。

（そして、俺は偶然にも中三の時に、その【始末】の現場を目撃しちゃったんだよね～）

所謂、【濡れ（血生臭い）仕事】の現場って奴だな。

本来なら、現場処分されてもおかしくないって雰囲気だったんだが、冒頭の台詞のような事を言われたって展開だったのさ。

つまり、【記憶消去】か、【ヤバい世界には片足どころか両足をツッコむ】か…

まぁ、普通ならより穏健な記憶消去なんだろうけど…

（なんか、嫌な予感がしたんだよなぁ…）

上手くは言えないんだけど、処理に失敗して【脳味噌に直接、スタンガンを押し付けて、脳細胞を殺した】ような状態で、記憶が全部パーになるような…

そんな、有り得ない状態が、待ってるような気がしてさ…

（だから、俺は【身内】を選んだ…）

天河さんの所属してるセクション…公式な名前はねぇけど、【ＥＳＭ（エンカウンター・シャドウ・ミッション：対極秘作戦）】メンバーズとでもしとこうかね？は、全員が表向きは別の顔を持っていて、”作戦”の時だけ集まるってセクションだ。

天河さんは、見ての通り”ラーメン屋の若店主”。

他にも、”坊主（修験者）”とか、”有名企業の社長”ってのもいる。

そして、作戦中の死亡は、決して【殉職】扱いにはならない。

せいぜい、【事故死】とか【行方不明】と新聞の片隅に乗るのが、関の山だろうな。

例え、捕まり拷問で吐かされても、俺達と政府の関係は、どれ程洗っても出てこないし、当然、救助の手がさしのべられる事はない。

（ただ、切り捨てられるだけ…）

所謂、【仕損じて、死して屍拾う者無し】ってそういう部隊だった…

「それで、天河さん…俺には、どんな【表の顔】を演じろって言うんです？」

俺が、受験先を切り替え、【武偵高校】を受験したのは、半分は表向きの【説得力のある戦闘力】を手に入れる為、半分は【カバー・ストーリー】を作る為だ。

（要するに、【強くて当たり前】って、説得力と戦闘力の獲得が目的だったし…）

「とりあえず、コレを見ておけ」

と、Ａ４サイズの紙封筒を渡された。

それを、開けると…

（……マヂ？）

中から出てきたのは、【上条刀磨】が”１６歳（今年１７歳）”で有ることを示す偽造された公的書類一式と、”とある高校”の編入試験合格通知や２年編入に関する書類だった…

（って、ヲイ！）

「あ～、天河さん…俺に高校に入りなおせと？　ついさっき、卒業してきたばっかなんですが…？」

過剰な見送りを受けて…

「いいじゃないか？　高校生をもう一回やれるなんて、滅多にできない経験だぜ？」

いや、滅多にできないってより、滅多にしたくないって言うか…

「まぁ、【西多摩】は学生の街だからな。今回の任務は、表向きは【統括理事会】と治安維持目的で契約する【現役高校生武偵】って事での活動になる。そうすりゃ、２年は【西多摩】で無理なく活動

できるだろ？　上手くダブれば3年だ」

そ、そりゃそうだけどさ…

「いや、年齢通りに大学生とか…」

すると、天河さんは何故か哀れみをこめた瞳で、

「…刀磨、”高度教育”が売りの【西多摩】で、お前の成績でいける大学があるとでも？」

「…すいません」

…フフフ。

現実ってのは、時に残酷だぜ（泣）

「でも、【武偵】免許をとったって経歴は、どうやってごまかしゃいいんです？」

日本じゃ、武偵の免許は、義務教育が終わらないと、そもそも【養成コース】自体が受講できないし、武偵になる最短ルートは、【武偵高校】だ。

それ以外の養成コースは、【高校卒業以降ではないと、受講不可】ってのが普通だしな…

「書類の経歴欄をよくみろ」

げっ！？
上条さんの【武偵免許】、ブリタニアで取ったことになってるしっ！？

「そりゃ、【武偵免許】は、確かに国際資格ですけどね…」

ちなみに、ブリタニアには【武偵免許】の資格所得年齢制限は無い筈だ。

（なんか、海外で免許とった奴が1年にいるって噂、聞いたことあるような…？）

何でも女の子らしいが…武偵免許持ってるのに、なんだって武偵高に通ってんだ？

（まぁ、いっか…）

「とりあえず、了解しましたっと。【上】からの命令は、身分偽って西多摩への【浸透工作】以外はない…って、事でいいんスか？」

「ああ。【作戦】がある場合は、おって連絡する」

と、天河さんはゴトッと目の前にラーメンの丼を置いて、

「看板メニュー、【天河らーめん】お待ち！」

えっ？
注文してないんですが…

「オゴリだ。昼飯まだなんだろ？　食ってけよ」

（まったく…）

天河さんに勝てねぇな～っと（苦笑）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

俺は、再び”銃弾”に乗り、スーパーレジェーラの進路を【西多摩】へ向ける。

やがて、【西多摩先端研究学園都市】とデカデカと彫りこんであるプレートが埋め込まれたゲート（検問）で、【天河らーめん】で受け取ったばかりの【真新しいＩＤカード（年齢詐称版）】と免許証（作者注：この世界では、１６歳で普通自動車免許が取れます）を提示して、何事もなく検問を通過。

街に入るが、新しい塒（ねぐら）に行く前に、少し立ち寄りたい場所があった。

俺は、有料駐車場に車を止め、携帯の地図データを元に、裏路地を

歩く。

そして、【西多摩】にしちゃあ古びたビルの前に足を止め、中へと入る。

エレベーターではなく、階段を使い三階へと上がり、そして真鍮のプレートがはめこまれた木製のドアの前に立つ。

真鍮プレートには、こう刻まれていた…

（ＢＡＲ【Ｆａｉｒｙ Ｔａｌｅｓ】か…）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ドアを抜けると、時間の関係からか店の中に他の客はいない。

落ち着いた古典的ブリタニア・パブ風の店の造りに、好感を覚えた…

よく研かれたマホガニーらしいカウンターの奥には、これまた典型的なバーテンダーの服装をした、長身のハンサム。

俺は、スツール（止まり木）に腰掛け、

「アルコールレスのビールを。車なもんでね…銘柄は、まかせんよ」
すると、長身ハンサムは、少し眉をよせ、
「ここは、カタギの学生サンが来る場所でも、来ていいって場所でもないぜ？」
ほう～…
プロの目から見てもカタギの学生に見えるって事は、案外、高２の学生でもやってけんのかもな。
「アンタは、【協力者】だって聞いてんだけど？」
俺は、苦笑混じりにその名を告げる。
「【西多摩】の順列２位、【垣根帝徳（かきね・ていとく）】さんよ？」

「なんだ、【政府の狗（いぬ）】か…」
と、垣根は詰まらなそうな顔をして、瓶のノンアルコール・ビールとグラスを出してきた。
「キツイね…上条刀磨（かみじょう・とうま）だ。それより、この店じゃ、ビールを瓶で出して客が手酌で飲むのが、スタイルなのかよ？」

すると垣根、フフンと鼻で笑い、

「ノンアルコール・ビールみてぇな【ビールもどき】に、サーバ・マシンなんて上等なモン使いたくねぇもんでな。オゴリにしてやるから、モンクたれんな」

俺は、その物言いに苦笑して、栓を抜くと、

「大したもんだにゃー。まさか、一見から”マスター”のオゴリが出るなんざ、驚きだぜよ～」

いつから居たのか、いきなり姿を現したのは、金髪にキャッツアイのグラサンに、はだけたアロハ・シャツの下に、金のネックレス…どう見ても、街のチンピラだが、

「何者だ？」

すると、金髪アロハは、無遠慮に俺の横のスツールに腰掛けると、

「土御門清春（つちみかど・きよはる）。アンタの受け皿になる【統括理事会】のエージェントみたいなもんだにゃー」

へぇ～っ。

わざわざ、待ってたってか？

「【ランボルギーニ・ガヤルドＬＰ５７０－４スーパーレジェーラ】…あ～んな【西多摩】でも滅多に見ない目立つ車に乗ってりゃ、見つけてくれって言ってるようなもんだにゃー」

（なるほど…）

どうやら、この土御門って奴、少なくとも道路交通監視システムや街の警戒システムが【見れる】立場なのは、確からしいな…

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

オマケ

その頃、【英雄】という二つ名で（本人が知らないとこで）呼ばれてた上条刀磨が卒業してしまい、少ししんみりしてしまった武偵高校【強襲科（アサルト）】の教室では…

「ちょっと！　”トーマ・カミジョー”が卒業式と同時に姿消したってホントっ！？」

いきなりそう叫びながら教室に入ってきたのは、なんだかピンクのツインテで、ちっこい女の子だった。

「あ、ああ。上条先輩なら、もう【任地】へ向かったけど？」

キンジがそう答えると、

「ムキィーッ！　まさか【パートナーの第一候補】が、卒業と同時に消えるなんて、予想外もいいとこだわっ！！」

どうやら、【アサルト】は、今日も賑やかなようだ（笑）

第1話：とあるバーテンダーの裏事情（後書き）

皆様、ご愛読ありがとうございましたm（__）m

なんか、【とある】シリーズのコメディSS（笑）にしては、文面が渋くなりすぎた事に、焦りを感じる暮灘です（笑）

「ミサカはミサカは、【ドキッ☆　男だらけの学園都市†演儀】になっていたと指摘しちゃったりして♪」

おまっ！？

わざわざ、コッチまで浸出してきたんかいっ！？

「フッフッフッ！　ミサカがミサカが、【バカ努力】のあとがきだけで満足すると思ったら、大間違いなのですっ♪　ミサカはミサカは、基本的に神出鬼没なのです！　エッヘン☆」

あ～、はいはい（^^；？

「それに、ミサカのミサカの【生まれ故郷】が舞台なので、ローカルの人間の協力は、不可欠だと思うのです♪」

そりゃそうか（^_^；）？

「でもでも、【第二位】がバーテンダー兼マスターというのは、ミサカ的にも予想外だったりして☆」

まぁ、彼は今回、【街の情報屋】兼【上条さん行き着けのバーのマスター】として立ち回るんではないかと（^^；？

基本的に、【垣根帝徳】や【土御門清春】はなど微妙（笑）に名前が違うのは、やはり【運命が違う】からなのでは、と…（^＿^；）？

次回は、ヒロインが出せたらいいなぁ～と思ってます。

では、次回もお会いできる事を期待して…

ご意見ご感想は、作品の推進力♪

いつでもお待ちしております（＿＿）

第２話：とある刀磨の無双＆１ｓｔフラグ（前書き）

皆様、おはよーございまーす☆

そろそろ、【西多摩の作者の】という枕詞（笑）をつけてもいいかな～と思ってる暮灘です（＾＾；？

さてさて、さっそく今回の読みどころは…って、モロにサブタイにありますね（＾＾；？

今回は、【とある科学の超電磁砲】アニメ版第４話”都市伝説”に出てきた【上条さんと御坂さんの１ｓｔコンタクト（笑）】のオマージュになっております（；＾＿＾Ａ？

原作の上条さんは、【正義感と実力が、アンバランス】な為に、記憶喪失になったりとかなり苦労しますが、では【武偵高校で３年間鍛え上げられた上条さん】ならば…？

というのが、今回のキー・コンセプトかも（＾＾；？

果たして、【原作と同じシチュエーション】で、【平行世界の二人】が出会ったら…

そんなシチュエーションを楽しんで頂ければ幸いです（　）

第２話：とある刀磨の無双＆１ｓｔフラグ

ＢＡＲ【Ｆａｉｒｙ Ｔａｌｅｓ】

「つまり、俺が【統括理事会】の使いっ走りで、バーテン（垣根）が【バランサー】なんだにゃー」

土御門は、自分達の事をそう簡潔に要約した。

【バランサー】ってのは、大雑把に言えば【西多摩】と【外部】との繋ぎを取り、【暗部】同士の軋轢や摩擦を解消しつつ、円滑に物事を進める…なんて役目だそーだ。

（だから、【協力者】って訳か…）

ちなみに、土御門も【西多摩】の【暗部】の一員だが、垣根とは所属するセクションが違うらしい。

【西多摩先端研究学園都市】ってのは、最近こそ【超能力】開発ばかりが着目されるが、元々は科学者、魔術師（魔導師）、錬金術師が集まり【魔法と科学の最先端の融合】を目的として計画された街だ。

超能力は、ここ数十年…最も発展したのは、最近３０年の間という極めて新しくカテゴライズされた【異能】であり、コンピュータの発展と密接な関係がある。

故に上記のような三者三様のトップ人材が集まる【西多摩】では、格好の【題材】と言えるって訳さ。

（逆に言えば、【超能力者以外の異能】もゴロゴロしてるって事か…）

聞けば、土御門は東洋魔術師、いわゆる【陰陽師】らしい。

（そういや、白雪がそっち系だったな…）

「ん？　【カミやん】、俺の顔に何かついてるかにゃー？」

か、カミやん？

土御門もけったいなアダ名を付けてくれんぜ…

「いや…土御門が陰陽師なら、【星伽の巫女】って名前に、聞き覚えあんのかな…とか思ってさ」

すると、土御門はサングラスで誤魔化しきれない程に驚いた顔をして、

「驚いたぜー！　こりゃまた、随分な【ビッグ・ネーム】が出てきたぜよ～。カミやん、知り合いなんか？」

ふ～ん…

白雪の実家って、そっちの筋じゃ、やっぱ有名なのか…

「後輩の女が、そうらしい。まぁ、本人曰く【雌奴隷】らしいけどな～」

すると、何がツボだったのか、土御門はヒュ～♪と口笛を吹いて、

「【星伽の巫女】も、最近は相当ぶっ飛んでんぜよ♪　時代も変わったって事かにゃ～」

なんか年寄り臭い事を言ってるなぁ～。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

学園都市内、夜のとある街角

「君、可愛いね～」

「しかも、その制服【常盤台】じゃん？」

「今から俺達と遊びに行かない？」

「帰りは、送ってやるからさぁ～」

「もっとも、いつ帰れるかわからねぇけどさ～」

”ギャハハハ”と勘に障る下品な笑い声に、茶色の髪をショートに揃えた少女は、眉をしかめて溜め息をついた。

（私に声をかけてくるなんて、バカな連中…）

背後から襲われない為か閉まった店のシャッターを背にし、いかにもガラの悪いチンピラに囲まれながら、少女は内心そのままのつまらなそうな顔を隠す気もないようだった。

（別に彼らが薄情って訳じゃない…わかってる）

【チンピラに囲まれてる自分を見て見ぬふりをして通り過ぎる】往来の人間達を見つめながら、彼女は思う。

（実際、ここに割って入ってきた所で、何かできる訳じゃないし、怪我をするだけだ…）

その諦めに似た感情に、少女は内心で溜め息を突き、

（誰だって、自分が可愛い。それが普通…見ず知らずの他人の為にそんな事をする奴がいるなら、よほどのバカか…）

そこまで考えが至った時に、

「お前ら街のチンピラ風情が誘うにしちゃあ、その娘は上玉過ぎやしねぇか？　ちったあ、身の程ってのをわきまえた方が賢明だぜ」

明らかに、彼女を取り囲むチンピラ達とは違う声が聞こえたのだった！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

時間は、少し遡る…

刀磨ｓｉｄｅ－

「悪いな、土御門」

「なぁ～に、気にすんなって。ご近所様のよしみだでや♪」

必要な情報を聞いた後にＢＡＲ【Ｆａｉｒｙ　Ｔａｌｅｓ】を出た俺は、土御門が周囲を案内してくれるって申し出を快く受けた。

「近所？」

「カミやんの部屋は、俺っちの隣部屋だにゃー」

ああ、納得。

「つまり、土御門は俺の【監視役】って事か？」

「建前はな。流石に【外部】と繋がりのある人間を野放しって訳にはいかねーってわけさ」

そりゃそうだ。

いくら俺がバカでも、いきなり信用されるって思うほど、世間知らずじゃない。

特に俺達みたいな【裏稼業】の人間なら、尚更だ。

（表世界じゃ美徳でも、裏じゃ…）

命取りなんて行為は、礼を挙げればきりがない。

「とはいえ、俺っちもこれでそれなりに忙しい身でな、四六時中監視してる訳じゃねーから、安心して良いぜー」

労働基準法なんざどこ吹く風の【暗部】ってのは、どこも何でも屋になりがちだから、そりゃそうだろうな。

「ああ、そうそう。ちなみに義理の妹と同棲してるから、そこんとこよろしく～」

…妹？

「その妹も、【暗部】なのか？」

「いーんや。”舞夏”は、全くの”カタギ”だにゃー。【暗部】のことは、何も知らんし、そもそも俺の【裏稼業】すらも知らねーの。出来れば…」

はぁ…。

大体、事情は分かった。

「わかったわかった。みなまで言うな。土御門の【本業】を悟られないようにしろ…だろ？」

「理解が早くて、助かるぜよ♪」

まぁ、何も知らない家族を、進んで裏世界に巻き込もうなんて奴は、普通はいないだろーしな。

なーんて事を考えてたら…

（ん…？）

女の子が、いかにもザコキャラ（笑）っぽいチンピラに囲まれていた。

（へぇ～っ、可愛い娘じゃん♪）

上条さん的には、ストライク・ゾーンのど真ん中って感じだ。

「ん？　どったのカミやん？」

「可愛い女の子とお近づきになるチャンス到来ってやつ？」

土御門も俺の視線の先に気付いたようで、

「やめとけやめとけ。面倒なだけぜよ」

まぁ、【下手に目立たない事】も、裏稼業じゃ必須生存術だが…

「土御門…俺の【表の顔】の売りは、【現役高校生武偵】でさぁ…」

「あん？　だから？」

自分の心の中に、【心地いい高揚感】がざわめくのが、はっきりと分かった。

「【武偵】ってのはな、面倒事に首を突っ込むのが、【仕事】なんだぜ？」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「お前ら街のチンピラ風情が誘うにしちゃあ、その娘は上玉過ぎやしねぇか？　ちったあ、身の程ってのをわきまえた方が賢明だぜ」

刀磨は、ニヤリッと笑いながら、チンピラ達を見回し、少女と目があった一瞬だけウインクをする。

キョトンとする少女に構わず、

「その娘は、今から俺がナンパ（保護）すんだからさぁ、お前ら邪魔だよ…さっさと消えろよ」

もちろん、挑発なのだが、効果は抜群だった。

「ああんっ！？　なんだ、テメェはっ！？」

刀磨より大柄な男が、さっき現場を見ていただけのひ弱な青年に入れたような、野良犬を追い払うような蹴りを飛ばしてきたが…

「正当防衛、成立」

刀磨には、それを食らってやる義理も無ければ慈悲もない。

蹴りを避けながら、ダブついたズボンを掴むと、同時に軸足を払い、

「えっ…？」

何が起こったか分からないという顔をする男の襟首を掴み…

”ガツンッ！”

あえて【後頭部を地面に叩き付ける】ように、倒した。
投げる…なんて、派手な物じゃない。
刀磨の流れる動きで、男の体が綺麗に天地反転しただけだ。

そして、後頭部をしこたまアスファルトに打ちすえ悶絶する男の腹に、なんの躊躇もなく踵を落とし、そのまま意識を刈り取る。

「俺が、何者かって？　ただの【美化委員】、もしくは【清掃係】ってとこかな？　お前らみたいな、数に頼らないと女の子一人まともに声もかけられない、レイプとナンパの意味の違いも分からないような、【社会のゴミ】を始末する係さ」

明らかに、演技なのだが、まんまと乗せられたチンピラその２が、

「テンメェ〜っ！！」

という声と共に殴りかかってくるが、”ぱしん”と円の動きで拳を逸らし、姿勢を懐に入り込み、

”ごすっ！　めきっ！”

カウンターの要領で突き出した肘が、チンピラその２の肋に命中し、それを砕いた。

だが、刀磨の攻撃はそれで終わらない。
くの字に折れ曲がり、痛みで倒れる男の顎を踏み抜き、ぐちゃりと砕いて再び意識を奪う。
基本は、【倒して踏みつける】。
しかし、何処までもえげつなく無慈悲…これが、武偵高の3年間で刀磨が身につけた【強襲科格闘術（アサルト・アーツ）】の本質だった。

「テメェ！　ナメた真似しやがってっ！！」
”チャキン！”
「ヤバっ…！」
チンピラ達が一斉にナイフを取り出すのを見て、少女は何らかのアクションを取ろうとするが、
「いいっていいって。”光り物”が怖くちゃ、鯖なんて食えねぇし」
なんて笑う刀磨に、チンピラはぶちキレたように、
「串刺しにしてやんよっ！！」
と、ナイフ片手に突っ込んできた！
だが…

「…トーシロが」

刀磨は、突き出されたナイフを握る拳を上から被せるように握り、空いた手で肘関節に手刀を叩きこみ、ナイフを持つ手を強制的に【内側】へ曲げた…

それはつまり、

”ザクッ”

チンピラが【自分のナイフで自分の腹を刺す】結果となった。

刀磨は、信じられないという顔をするチンピラの脚を更に引っ掛け、【腹にナイフが刺さったまま】、前のめりに倒す。

「自分が串刺しになってちゃ、世話ねーぜ？」

更に奥深くまでナイフを食い込ませて倒れるチンピラを一瞥し、

「言っとくけどさ、ナイフは無闇に抜かない方が良いぜ？　出血多量で１０分はもたねーだろうし」

そして、残りのチンピラ達に近づきながら、

「んで…次に死にたいのは、どいつだ？」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「アンタって、わけわからないわね…」

【無双】の現場から、成り行き的に一緒に逃げ出す事になった少女の言葉に、刀磨は不思議そうな顔を向けた。

「ん？　どこらへんがだ？」

「最初、倒した不良達から財布かっぱいでお札を引き抜いた時は、なんて奴かと思ったけど…」

ちなみに、札を抜いた財布はチンピラが持ってたライターで燃やして、一緒に取り上げた携帯は踏み壊していた。

「でも、そのお金を全部、【チャイルド・エラー】の募金箱に突っ込むって、アンタ何を考えてるのよっ！？」

すると刀磨は、事も無げに、

「俺はプロだから、只働きはしない。だが、お前さんから依頼を受けた訳じゃないから、お前さんからは金は取れない」

「そ、そーよ！　あんな連中、私一人でも…」

だが、刀磨はポンと茶髪の上に手を置いて軽く撫でると、

「なっ、なあっ！？」

顔を真っ赤にする少女に、

「まぁ、聞け。だから、頂けるとこから頂いたのさ。清掃代金みたいなもんさ」

ちなみに、財布を燃やし携帯を壊したのは、【安全策】のような物だ。

「だけど、上条さんは今のところ、金には困ってないからな…」

そして、クスリと悪戯が成功した悪ガキのように笑い、

「だから、有効活用しただけだ」

（コイツ、こんな顔して笑うんだぁ…）

そう何気なく思っていた少女だったが、

「えっ？　【カミジョー】？　それが、アンタの名前？」

すると、刀磨はポンと手を打ち、

「そういや、まだ名乗ってなかったな。俺は、【上条刀磨（かみじょう・とうま）】。しがない高校生だ」

すると少女は、何を思ったかコホンと咳払いして、

「人の名前は聞いておいて、自分が名乗らないのは、礼儀知らずよね？　私は”みこと”。【御坂命（みさか・みこと）】よ」

刀磨は、感心したように、

「さすが名門【常盤台】のお嬢様だな？　礼儀作法も心得てるって訳かい？」

「ふふん♪　まあね～♪」

と、慎ましやかな胸を張る命に、刀磨は微笑ましい物を感じながら、

「え～と、”みさか”？　”みこと”？　どっちで呼んだ方が、お嬢様はお気に召すんだ？」

命は、刀磨の言い回しが面白かったのか、クスクス笑いながら、

「”みこと”で良いわよ♪　その代わり、私も”とうま”って呼ばせてもらうわよ？」

「構わねーぜ？　それより、みこと…」

刀磨はとある駐車場に足を止め、

「送らせてもらえるか？　そろそろ女の子が出歩くには、賛成できねー時間だからな」

第2話：とある刀磨の無双&1stフラグ（後書き）

皆様、ご愛読ありがとうございましたm（__）m

何故か、土御門を書くのが楽しくて仕方無い作者の暮灘です（^^；？

「ミサカはミサカは、兄が清春で妹が舞夏と、兄だけが名前が変わってるのが不思議だと疑問を呈します？」

それは、土御門（兄）が能力開発を受けておらず、【陰陽師】としてハンデが無い状態で活動してる事が、原作と大きな違いって事だから。

冒頭でも出てきたけど、【超能力】開発オンリーの原作【学園都市】と違って、【西多摩】はむしろ【超能力】は新参、魔術師や錬金術師もかなりいます。

「もしかして、【スキルアウト】とかっていないんですか？って、ミサカはミサカは聞いてみちゃったりして♪」

いない訳じゃないけど、原作よりは少ないだろうね～♪

なんせ、超能力が駄目でも、”魔術師”とか”錬金術師”って道もあるし、逆に【超能力＝最強】って誰も思ってないから、原作ほど傲慢じゃないし。

もしかしたら、原作で【レベル0】で悩んでた【四人娘の一人】も、”大化け”してる可能性があるし（^^；？

「おお～っ！　何だか、愉快な事になっていそうだと、ミサカはミサカは期待しちゃったりして～♪」

さてさて、【原作】を叩き台にした【二人のなれ初め】は、如何だったでしょうか？（＾＾；？

やはり、【正規の高度戦闘訓練】を受けた上条さんなら、これぐらいは出来るんじゃないかなぁ～と（＾＿＾；）？

次回は、まだ内容未定ですが、展開から考えると、わりと【超電磁砲】よりの話とか増えるのでは…？とか考えてます（；＾＿＾Ａ？

では、また次回がある事を祈りつつ…

ご意見ご感想は、モチベーションの源☆

いつでもお待ちしております（＿＿）

第3話：とある電撃使いの初恋エンカウント？（前書き）

皆様、おはよーございます☆

真剣に能力いらないから脳力上げられるレベル・アッパーが欲しい作者の暮灘です（＾＾；？

さてさて、本日の読みどころ（トピック）は…

もう、【刀磨（とうま）と命（みこと）の原作じゃ有り得ないフラグ構築合戦（笑）】の一言に尽きるような？

【緋弾のアリア】ネタ＆【武偵】ネタなんかを交えながら、結局、最初から最後まで、

『書いてるコッチが恥ずかしいわ～っ！！』

と、ツッコミたくなるぐらい、甘酸っぱい雰囲気で出してます（＾＾；？

なんか、”みこと”を可愛く書きすぎたような気がしないでもないけど、そこはヒロイン補正というか、仕様って事で（＾＿＾；）？

ちなみに、今回のエピソード全て原作にない、暮灘の捏造（笑）となっています。

最近、この作品のコンセプトや暮灘の作風が、【とある魔術の禁書目録】の読者層の皆様に合ってないのでは？という懸念があるのですが…

でも、とりあえず主要キャラが出揃うまでは描くつもりですので、暖かく見て頂ければ幸いです（＿＿）

では、全編オリジナルなエピソードですが、お楽しみください（o^―,）b☆

第3話：とある電撃使いの初恋エンカウント？

夜、【西多摩先端研究学園都市】

「送らせてもらえるか？　そろそろ女の子が出歩くには、賛成できねー時間だからな」

成り行き的に一緒に歩いていた上条刀磨（かみじょう・とうま）が、とあるコイン・パーキングの前で足を止めてそう苦笑すると、

「あちゃ～、ホントだ。もうこんな時間なのかぁ…」

御坂命（みさか・みこと）を名乗る少女は、自分の【ゲコ太カスタム（笑）】モデルの携帯液晶画面を見ながら、がっくり肩を落とし、

「晩御飯、食べそびれたぁ～」

命の気の抜けた声に、刀磨はカクッと片方の肩をコケさせ、

「いや、心配するとこって…そこ？」

「えっ？　他に心配するとこってあるの？」

キョトンとする命に、刀磨は頭を掻きながら、

「いや、”みこと”は常盤台だろ？　寮住まいじゃないのか？」
サラッと名前を呼ばれた命は、少しだけ顔を赤らめてしまう。
（落ち着け、私！　名前を呼び捨てで呼んでいいって言ったの、私じゃない！）
「え、えっと、それって門限とかの話っ！？　だ、大丈夫よっ！
黒子…えっと、後輩の娘が、Ｌｖ４のテレポーターだから、寮の近くで携帯入れて、ちょちょいってピックアップしてもらえばいいだけだし！」
（わ、私、何をテンパってるのよっ！？）

「ん？　どうした？　なんか、顔が赤いぞ？」
「そ、そんな事ないからっ！？」
”こつんっ”
「ひゃうっ！？」
突然、くっつけられたオデコとオデコに、素っ頓狂な声を上げる命である。
「別に熱はないようだけど…んっ？　引きつってどうした？」

「ととと、”とうま”っ！？　熱計るにしたって、どどど、どんな計り方してんのよっ！？」

思い切り熱暴走仕掛ける命に、刀磨は不思議そうに、

「えっ？　この計り方って、メジャーじゃないのか？　母さんも保健の先生（女医）もクラスメート（女子限定）も、確かこんな計り方だったぜ？」

「メジャーじゃないからっ！！　つか、”とうま”って、どんな環境で育ってきたのよっ！？」

（どういう環境って言われてもなぁ～）

刀磨は少し思巡すると、

「３年間で、１００人中３人が死ぬ環境…かな？」

「へっ？」

鳩が豆鉄砲を食ったような顔をする命だったが、

「深く気にするなって。ん～…そうだな。”みこと”も夕飯を食いそびれたなら、一緒に食わないか？　というか、この辺りで飯の美味い店とか教えて貰えると、ありがてーんだけど？」

「えっ？　えっと…それ、どういう意味？」

すると、刀磨は再び悪戯小僧の顔で、

「”ナンパ”だって言わなかったっけ？　”みこと”は、上条さんのストライクゾーンど真ん中だしなぁ～」

”ぼむっ！”

命は、【紅葉を散らす】なんて雅な表現の範疇を軽く天元突破する勢いで顔を真っ赤にして、

「なななななっ！」

（まさか、この程度で刺激が強すぎた…とか？）

凶悪な犯罪者との切った張ったが日常茶飯事の武偵高校”強襲科（アサルト）”、別名【明日なき学科（ノーマーシィー・コース）】では、その性質から妙にサバけた性格の女の子が、大半だった。

それはそうだろう。

いつ果てるかわからぬ生命（いのち）なら、【生きてる瞬間】を刹那的に楽しんで、何が悪いと言うのだろう？

例えば、【プロローグ】で、星伽白雪と峰理子が、遠山金二の【雌奴隷】と言い張りベタベタ左右を固めていたが、あそこまで極端なのは少数派（しかも、キンジには、まだオプションが色々いるらしい…）でも、あの状態…人間も動物である以上、生存本能を危機的なレベルで刺激されれば、誰でも無意識から異性を求めたくなる、ぶっちゃけ【子作りして子孫を残したくなる】という【種の保存本

能】は、アサルトに所属している人間なら、実感として理解できる。

ついでに言えば、【ＨＳＳモード（ヒステリア・モード）】が、”平常運転”となった今のキンジは、【アサルト１年最強（刀磨の卒業により、”アサルト在校生最強説”も浮上中）】の存在であり、《無意識に庇護を求める女の子》が群がるのも、また当然と思われていた。

ちなみに、これを【恋愛感情に作用する効果】を抽出して表す心理学用語が、いわゆる【吊り橋効果】だ。

刀磨が３年間、何度も命を落としかけながら過ごしてきたのは、そういう場所だ。

ならば、そんな【アサルトの少女達】が、【女性像のデフォ】になってもおかしくはない。

そして、比喩ではなく《鉛弾を食らっても、そう簡単には死なない武闘派の少女達》に比べるなら、目の前の命は、なんと言うか…

（なんつ～、可愛い生き物…）

比較対象が間違ってるような気もするが、まぁ、それが刀磨のストレートな命への感想だった。

まぁ、だから少々やり辛くもあるのだが…

「あ～、それはとりあえず半分な。もう半分は俺、今日この街に着いたばかりで、この辺の地理とか全然わからねーのさ（汗）　だから、飯が食えるとこを案内してくれると、助かるなぁ～とか思っちゃったりするんだけど…駄目かな？」

「えっ？　う、うんっ！　そ、そういう事ならわかった！　あ、案内してあげる！　あっ、でも私もファミレスぐらいしか分からないんだけどね！　アハハハ…」

【強襲科】に居なかったタイプの女の子に戸惑う刀磨に輪をかけて、命の笑顔の方がぎこちなかった事を追記しておこう。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ファミレス【ｊｏｓｅｐｈ－ｓ】
窓際席（禁煙）

「ねぇ…”とうま”って、どこかの金持ちボンボンとか？」

メニューとにらめっこしてた刀磨は顔を上げると、

「ん？　”みこと”には、そう見えるのか？」

「そう見えないから、不思議なのよ…」

命は、窓の外…駐車場に停まる刀磨の愛車、【ランボルギーニ・ガヤルドＬＰ５７０－４スーパーレジェーラ】を一瞥して、

「車は、そんなに詳しくないけど…高いんじゃない？　アレ？」

「まぁ、高いんじゃないか？　多分、オプションやら諸経費やらその他諸々入れるなら、２０００万くらいすんじゃね？」

作者注：
現実の日本では、約３０００万円ぐらいしますが、【この世界の日本】は、【巨大過ぎる貿易黒字】の不均衡是正政策の一環として、【輸入ガソリン車（国産車は原則として、電気自動車しか存在しない）】への税制優遇や、生産国の価格を基準とした徹底的な【卸売価格行政指導】を行なっていて、高くても現実より３割は安く、車種によっては半額以下で販売されてます。

というか、日本で買う外車は、高すぎ！

「２０００万って…簡単に言うけど、実家が金持ちじゃないなら、なんだって…」

いきりたつような命に、刀磨は事も無げに、

「悪党もしくは悪人から、頂戴したのさ」

「はぁ？」

首を捻る命に、刀磨は苦笑するような表情で、

「さっき、チンピラからブン取った万券と一緒さ。悪党のコレクションにしておくより、俺が乗り回した方が、まだ有効利用してるって言えるだろ？」

刀磨は小さく笑い、

「それに作った人間も、そっちの方が喜ぶんじゃねーの？」

「そ、そりゃそうかもしんないけどさ…」

（嘘は、言ってねーよな？）

と、刀磨は少し自問自答してみる。

事情は、刀磨が命に説明したよりもう少し複雑だ。

確かに、【武偵】としての刀磨は、例え犯罪者の持ち物であっても、勝手に接収したりはできない。

そんな事がバレでもしたら、【証拠品の隠得】に問われ、即座に武偵免許取消になるだろう。

だが、第1話に出てきた【ＥＳＭ（エンカウンター・シャドウ・ミ

ッション：対極秘作戦）メンバーズ】として活動した場合は、話が異なる。

【ＥＳＭメンバー】が【始末】するのは、金もしくは権力、あるいは両方が有るために【表の法律】では裁けぬが、【国家最上部】から【国家や民族の害悪】の烙印を押された者達ばかりだ。

そして、【ＥＳＭメンバー】は、あくまで対象に【病死や事故死】してもらう為の【実働部隊】で、その前に別動隊が、あらゆる方面で調査を行う。

そして、【病死や事故死】の後は、”都合良く”、【資産全てを、国家に没収されるだけの悪行の証拠】が出揃う仕組みになっている。

その中には、現金や有価証券、各種権利書に土地建物や、美術品、貴金属塊、宝石類等の様々な物が含まれるが、その中でも【未登録の高級輸入車】という物が、少なくない数含まれているのだ。

それが、ＥＳＭメンバーの【戦利品】となる。

まぁ、正確には【ＥＳＭメンバーの本当の個人名義】ではなく、ＥＳＭメンバーを統括する【書類上は存在しない政府セクション】が用意した、【実在しない人物の名義】に公的資料は、全て書き換えらる。

そのような【足跡消し（ロンダリング）】が行われた車を、刀磨もその一員であるＥＳＭメンバーズは、”半私物化”して使うのだ。

あえて半私物化と表現したのは、【作戦】で使う事も（そして、同時に作戦中に大破する事も）、多いからだ。

（”消耗品”に一々私費を投入できるほど、流石に給料高くないしなぁ～）

例外はあるが、特にガソリン・エンジンの高級車は、大抵は高速が出せる。

時には、【標的】に【無謀運転の末の交通事故死】してもらわねばならない場合がある以上、高性能車は必須と言っていい。

高速交通機動隊の特務チームが使ってるような、時速４００ｋｍ／ｈ以上を楽勝で出せる、一切市販されてない【特別仕様の電気自動車】でも配備されるなら話は違うだろうが、資料上は【一介の民間人】に過ぎないＥＳＭメンバーが扱うには、無理の有りすぎる装備だ。

「まっ、車の話はさておいて、飯にしようぜ？　ご期待の金持ちボンボンじゃねーけど、”みこと”に晩飯おごるくらいは、訳ねーからさ☆」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

そして、再び夜の【西多摩】の街
車中にて。

「あっ、そういやさ、”みこと”」

「ん？　なぁに、”とうま”？」

少しイントネーションに、眠気が入り始める命。

それにしてもこの二人、打ち解けるのが早い。

最初は、どことなく（特に命の方が）ぎこちなかった【名前を呼んで（笑）】が、同じテーブルで一緒に夕食を食べた事が効いたのか、今では、まるで何年も前から知ってたかのように、自然に口から紡ぎ出されている。

それはどこか【別の世界】の、”届かなかった想い”や”応えられなかった想い”を埋め合わせるが如く…

「さっき言ってた、【後輩のテレポーターの娘】ってのに、連絡しなくても、多分、大丈夫だぞ？」

「えっ？　なんで？」

「要するに、その【寮監】を説得できればいい訳なんだろ？」

「そうなんだけど、ウチの寮監って、何て言うか…」

流石に【嫁き遅れのオールド・ミス】とは言えない命であった。

「たまには、権威とか身分ってのを、有効活用するのもバチは当たらねーだろうからな」

刀磨は、自信有りげに微笑み、

「まっ、上条さんにドーンと任せておきなさいって♪　こう見えても、色々と【プロ】ですから」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

命の住処、常盤台学生寮

「【S級武装偵護官】の”上条刀磨”と申します。今回は、【スキルアウト】による集団暴行事件に、偶発的にこちらの御坂さんが巻き込まれてしまい、事件その物は現場レベルで解決しましたが、調書作成にご協力頂いた為、このような時間まで拘束してしまいました」

そうＩＤ…【武偵免許】を提示しながら、笑顔で流れるように眼鏡の寮監に説明する刀磨を見ながら、命は金魚のように口をパクパクさせていた（笑）

「事情は、わかりました。わざわざ、ウチの寮生を送り届けて下さり、本当にありがとうございました。親御さんよりお預かりした大切な子供達に何かあれば、私どもも一大事ですから」

と、頭を下げて大人の対応をする寮監。

「いえ、どうか頭をお上げください。市民の安全を護るのも本官達、【武偵】の仕事ですから、どうかお気になさらずに」

そう告げた後に、刀磨は寮監に背を向ける形で、命に向き直り、

「御坂さん、本日は事件解決の為とはいえ、お手間を取らせてすみませんでした」

と、口では真面目な事を言っていたが、命だけが見える刀磨の瞳は、イタズラっぽくウインクし、口には人差し指が当てられ、”ナイショだぞ♪”というポーズを取っていたのだった。

第3話：とある電撃使いの初恋エンカウント？（後書き）

皆様、ご愛読ありがとうございましたm（__）m

何とか眠気との勝負に打ち勝ち、ここまで辿り着いた暮灘です（^^；？

「ミサカはミサカは、いきなりお姉さまが”とうま”とお食事というセミ・デート展開に驚きだったりして♪」

いや、まったく（^^；？

実は書いてる作者も、原作で結ばれなかった残留思念（笑）の影響か、ここまで二人が接近するとは思ってなかったよ（苦笑）

「でもでも、上条刀磨が原作より大人のクセに、実はかなりの天然であることが判明しちゃったりして☆」

つーか、刀磨の【男女交際】の基準が、激しく不安（^_^；）？

なんせ、基準点が【アサルト】…は、ともかく、【キンジ（上限）】だし…

「しかも、お姉さまはあれでわりかしウブだって事を、ミサカはミサカはバラしちゃたりして～♪」

それにしても、まさか1話丸々刀磨と命だけで終わるとは思わなかった（；^_^A？

次回は…まだ未定なんですけど、まぁ、どちらかと言えば【超電磁砲】的な展開になるのではと（＾＾；？

では、またお会いできる事を祈りつつ…

ご意見ご感想は、作品のモチベーションその物☆

いつでもお待ちしております（__）

第４話：とある＆ｑｕｏｔ；みこと＆ｑｕｏｔ；のＬｖ５な理由（わけ）（前書

皆様、こんばんはー☆

執筆意欲はあるのに、執筆速度は上がらない暮灘です（＾＾；？

え～と、今回は前半はちょろっと【部外者から見た《浦賀沖海難事故》】と、その顛末である《レインボーブリッジ謎の宙吊り事件（笑）》】なんかが出てきますが、殆んどが命（みこと）の掘り下げ話となっております（＾＿＾；）？

前に何度か描きましたが、色んな意味で名前が違うという事は、【割り振れた運命や因果律】が、”原作”と大きく違うという【象徴】です。

だから当然、みことが【Ｌｖ１から５になるまで頑張れた理由】も違うというのが、今回のエピソードです（＾＾；？

原作に比べて、”みこと”が強いかどうかは、皆様の判断に任せるとして、少なくとも手数や手札は、多そうですね～（笑）

とりあえず、”こんな娘がヒロインです”的なエピソードですが、楽しんで頂ければ幸いです（＿＿）

常盤台女子寮
玄関ロビー

命（みこと）ｓｉｄｅ－

「はぁ…」

（帰っちゃったなぁ…）

「なんなんだろ、”とうま”って…」

私は、【スーパーレジェーラ（とうまの車の名前らしい）】のテールランプが消えた後も、ぼんやりと外を見ていた。

寮監からは、

『今日は、たまたま【武偵】がいたから良いようなものの、スキルアウトに絡まれるような場所に行くんじゃない！』

って注意された後も、何か色々更に言われたような気がするけど、私は右から左に聞き流してた。

（【武偵】かぁ…）

一般的に聞くことの少ない名詞だけど…

（確か、【浦賀沖海難事故】だったっけ…？）

最近、【武偵】って単語を聞いたのは、確かその時だったと思う。

沈みかけた豪華客船に、たまたま乗り合わせてた【武偵】が、乗客全員を避難させた後、自分は逃げ遅れて亡くなったそうだ…

それは、間違いなく弱い人を助けたいって自己犠牲に満ちた…英雄的な行動だった筈だけど…

（あの時は、酷かったよね…）

乗客からの集団訴訟を恐れたクルージング企画会社は、旧知のマスコミ各社の重役に金をばら蒔き、【殉職した武偵】に全ての責任を押し付ける形になるよう、世論操作や誘導を依頼した…

（”死人に口無し”とは、よくぞ言ったもんよ…）

でも、本来なら上手くいく筈だった、亡くなった武偵をスケープゴートにする為の世論の操作と誘導は、あっさり頓挫し瓦解した。

（【レインボーブリッジ謎の宙吊り事件】…あれは、傑作だったわ～♪）

【浦賀沖海難事故】すぐ後、【スケープゴートの仕掛け人】の脂ギッシュなオヤジ達が、【何者】かに誘拐され、鼻っ柱を潰された上にひん剥かれ、レインボーブリッジから逆さ吊りにされた事件のことだ。

（最後は、リモコン操作で縄を切られて、冬の東京湾で、寒中水泳…だっけ？）

そして、その模様はネットの巨大動画サイト（複数）を通じて、世界中にリアルタイム配信されたみたいだ。

初春さん（ああ、私の友達の一人よ？）によれば、【真実をねじ曲げたマスゴミの失墜】を祝して、ネットではその日、アチコチがお祭り騒ぎだったらしい。

【レインボーブリッジ謎の宙吊り事件】の犯人は、結局誰一人として捕まらなかったけど…

（あれって絶対に犯人は、【武偵】よね？）

世論なんて現金なもので、自分達が乗せられて【哀れなスケープゴートにされた武偵】を責めた事を棚にあげ、【自分達もマスゴミに騙された】と今度は被害者面で、マスコミ叩きを始めた。

また、【義憤にかられた者達を責めるな】なんて調子のいい世論に押されたせいか、事件の捜査は中途半端に打ち切られ、またクルージング企画会社は、一番恐れていた集団訴訟を乗客達に起こされて敗訴、莫大な慰謝料に耐えかね倒産。

重役以上の経営責任者側は、【懲罰的慰謝料請求】の為、免責が許されず会社どころか個人資産までが没収対象となり、徴収されたそれは慰謝料の補填に回されたって話だ。

（あと、東京湾にドボンされた連中全員分の個人情報が、ネットに一斉に流されたみたいねぇ～）

名前、携帯を含む電話番号やEメールアドレス、住所や家族構成、それに過去のスキャンダルなんかが流出したって話だ。

「意趣返しのつもりなんだろうけど…」

（それにしても、やり方が徹底してるわよね…）

公的機関に所属しない戦闘のプロ…

「【武装偵護官】かぁ…」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ただいま～」

部屋に戻ると…

「お姉様ぁ～～～っ！！　携帯も繋がらず、連絡一つも寄越さず、黒子は…黒子は、心配していましたのですの～ぉ～～っ！！」

部屋に帰ってくるなり、豪快にタックルをかましてきたのはルームメイトの、

「黒子っ！　いきなり、重心を低くした鋭角気味のタックルで抱き着いてくるんじゃないわよっ！！」

この今、私に抱き着いてるちびっこいツインテールは、【白井黒子】。

後輩で、Ｌｖ４のテレポーターなんだけど…

「へっへっへっ！　このままお姉様をテイクダウンして、マウントポジションから…」

ガチ百合趣味なのが、タマに傷だ（汗）

私は、空気中の静電気を集束させつつ電圧を上昇するように頭の中で演算、黒子の背後に電気の塊である【帯電球体（コンデンサ・スフィア）】を生成する。

更にその帯電球体を圧縮して【集束高電圧の”投擲鎗(ジャベリン)”】を形成して、

「く～ろ～こ～！　あと3秒以内に離れないと、漏れなく酷い目に合うわよ…？」

しかし、人の話を聞いちゃいねぇ黒子は、

「ア～ッ！　押し倒すのもいいですが、この慎ましやかな胸の感触を、いつまでも味わっていたいですわ～♪」

（…処刑決定）

「”フォトン・ジャベリン”、シュート！」

【死なない程度の電圧】に抑えた【雷鎗】が、黒子の背中…ちょうど肩胛骨の間、心臓の真裏辺りに命中して、

”バリバリバリッ！”

「あんぎゃあ～～～っ！！！？」

はい、【黒子の黒焼き】いっちょあがりってとこね？

「お、お姉様の愛が痛いですわ…ガクッ！」

意識が刈り取られる寸前に、あれだけのダメージを食らってもとりあえず、言いたい事は言っておく黒子の精神力とか根性は、ある意味、敬服するわね～。

明らかに方向性間違えた、無駄遣いだけどね。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

（さてと…）

とりあえず、失神したまま床でピクピクしてる黒子は放置して、私はパソコンを立ち上げる。

私なりの【パーソナル・リアリティ】の強化法…確固たる【イメージ】の確立の為に、ひたすら【とあるアニメ】を見る事にした。

その作品は、私が子供の頃に初めて見て大好きになり、今でも大好きな作品…

内容は、二人の【少女魔術師】を核として描かれる【熱血バトル】物に、ちょこっとＳＦ要素が加味されたような感じの作風だ。

確か、主人公とライバルの二人の少女の年齢は、放映の時は９歳って設定で、私も当時は同い年だったから、凄く共感できたんだ…

（第３期に入ったらいきなり１０年後で、軍隊アニメになってたのは驚いたけど…）

そして、今見ているのは第１期シリーズ、通称【無印】をリメイクした【劇場版】。
正確には、その戦闘シーンを抽出して《自家編集》した、イメージ用の【教材】だ。

（自分の能力が、【電撃使い（エレクトロ・マスター）】だって知ったときは、嬉しかったなぁ～…）

【髪の色と性格が、どことなく私と似てる】主人公の娘も捨てがたいけど、その作品で一番好きだったのは、【ライバル】の娘だった。
金髪のツインテールと、少し寂しそうな赤い瞳が印象的な女の子…

（その最大の特徴が、【魔力の電気変換体質】だったんだよね…）

そう、魔力を攻撃魔術に転換すると、自然に電気を帯びるって設定だったんだ。

そもそも、私がレベル１からレベル５へ上がったのって、表向きは【自分の能力（ちから）の限界を見てみたかったから】なんて格好いい理由を

言ってるけど、本当はもっとシンプルで…

（《あの娘》みたいな戦い方をしてみたかったってだけなんだよね〜）

魔術師ではなく、【能力者】を目指したのは、魔術師としての素養が低かっただけじゃない。

手に入る限りの資料を読み漁っても、《あの娘》みたいな力を使う魔術師はいなかった。

（だから、私が再現したくなったんだよ…）

【《あの娘》の力を現実世界に再現すること】…

他人が聞いたら、バカバカしい子供っぽい思いかもしれないけど…

（それが、私の【私だけの現実（パーソナル・リアリティー）】の源だから…）

世間では、【Ｌｖ５の超電磁砲（レールガン）】として知られてるし、実際にゲーセンのコインを弾いて電磁場で形成した”力場砲身（フィールド・バレル）”内部で、音速の３倍程度まで電磁加速して射出する【超電磁砲】が、私の能力の代名詞になってるけど…

（でも、あれって電力消費の割に威力あるし、使い勝手がいいから多様してるだけだったりして…）

私の本来の…研究員達に隠し、データベースへの登録を阻止してる力は、もっと別だ。

例えば、私が最初に試したのは、生体電流の刺激による筋肉の一時的な加速と反応速度の上昇、肉体の【リミッター】の一時的な解除…《あの娘》の得意としてた瞬間加速【ライトニング・アクション（雷光瞬動）】の再現だった。

でも、それが成功した直ぐ後に、私は欠点に気付いちゃった…

（動きが速すぎて、自分の頭の処理や認識が、追いつかなくなっちゃってたんだよねぇ～）

そこで、資料を読み漁ったのは、単純に言えば”頭を良くする方法”。

具体的には、演算速度を引き上げ、尚且つ【思考や演算の並列処理】を可能とすること。

そして、【作品】の中に、ヒントはあった。

それは、作品に登場する魔術師達が、【複数の魔術を同時使用】する時に使うとされた【マルチタスク】って概念。

私は、【マルチタスク】をパーソナル・リアライズ（固有強イメージ化）して、脳内のシナプス間を流れる微弱な電気信号をコントロールして、【人間が生涯使わないだろう脳の未使用領域】まで活性化させたのよ。

凄く繊細で地味、根気のいる作業の繰り返しだったけど、電気刺激

によって【人間の脳には普通なら有り得ないレベルの、脳全体の細胞に高密度なシナプス・ネットワーク】を形成する事に成功したんだ。

そして、ついに【マルチタスク】処理を獲得したのよっ！

（だから、こうして【劇場版】を鑑賞しながら、【技】のシミュレートができるんだけど…）

今も画面の中で大暴れしてる二人の【魔法少女】と違うのは、マルチタスクで処理しているのが、【術式】じゃなくて【演算】って事ぐらいかな？

ちなみに、今【並列処理でシミュレート】をしてるのは、画面の中で《あの娘》が決めようとしてる【フォトン・ジャベリン・ファランクス・シフト】よ。

でも、この技って機関銃の弾幕射撃みたいに、雑魚的な大軍相手に”単体殲滅戦”を仕掛ける時に向いてる技じゃない？

（単独の強敵なら、逃げ場が無いようにコンデンサ・スフィアでぐるりと取り囲んで、全方位から一斉射撃を食らわせる【エクスキューション・シフト】の方が向いてるわよね？）

とりあえず、この【ファランクス・シフト】と【エクスキューション・シフト】をモノにするのが、目下の目標かな？

えっ？

【無印】の頃までの他の技なら、殆ど再現できるわよ？

【フォトン・ジャベリン】も、”マルチ・ショット”までなら、実戦レベルだと思うし、【ライトニング・レイジ】は体内発電の”雷撃”で代用できるし、【ライトニング・フォール】は、まんま【落雷】だしね。

【ライトニング・スマッシャー】は、位相を揃えた指向性電磁波（ＥＭＰメーザー）でなんとかなるし、【アーク・シミター】は、砂鉄を磁力結束させて三日月刃を形成してから、更に帯電させて【電磁浮遊（ノ・クラフト）】の要領で投げれば、再現できるわよ？

（多分、私の能力の成長って、１９歳の《この娘》に追いついた時に、終わる気がするな…）

その先は、上手くイメージできる自信がない。

もっとも…

（そこまでいくのが、果てしなく長い道のりなんだけどね）

だって私は１４歳だけど、まだ【無印】の頃にも追いついたとは言えないし、２期目の【Ａｓ】に追い付くには、

「まずは、”電離気体（プラズマ）”の自己生成できるようにならないとネッ♪」

ホ～ント挑戦のしがいがあるわっ！！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

（そういえば…）

【劇場版】を見終わった私は、パソコンをネットに接続して、検索ワードを打ち込む。

（【武偵】っと…）

「へぇ～…ブリタニア語だと、【Ｃｏｕｎｔｅｒ　Ｃｒｉｍｅ　Ｖａｎｇｕａｒｄ】って言うんだぁ…」

と、某巨大辞書サイトで調べてると…

「お姉様、【武装偵護官】の事なんて調べてどうしたんですの？」

「うわぁっ！？　びっくりしたっ！　黒子、アンタもう復活したのっ！？」

というか、日に日に打たれ強くなってるような…？

（まさか、”耐電体質”とかになってる…とか？）

でも、黒子に下手に説明すると、何故か話がややこしくなりそうな気がするのよねぇ～…

第４話：とある＆ｑｕｏｔ；みこと＆ｑｕｏｔ；のＬｖ５な理由（わけ）（後書

皆様、ご愛読ありがとうございましたｍ（＿＿）ｍ

なんか、今回は執筆速度が上がらずに困った暮灘です（＾＾；？

いや、書いてる本人は、楽しいんですが（笑）

「ミサカはミサカは、とりあえず”みこと”が、某電気使いの魔法少女（笑）に憧れてＬｖ５になったという予想の斜め上の理由に、驚きを隠せなかったりして♪」

実は、

【ビリビリ＝運命】

ってアイデアその物は、大分前からあったんよ（＾＾；？

みことの能力って元々汎用性高いから、【より細かくて速い演算処理】が可能なら、運命ちゃんの技の現実転換（リアライズ）も可能なんじゃないかってね（笑）

「暮灘的には、どのぐらいのパワーバランスなのかと、ミサカはミサカは聞いてみちゃったりして☆」

う～ん…

【第三位】は、変わらない。

流石の命でも、【今の戦闘力】では、いっぽーさんやていとくん相

手だと、やっぱり相性的に厳しいとこがある。

なんせ、あの上位二人は、能力の強さだけでなく【異質】っぷりもケタ違いだし（＾＿＾；）？

「ふむふむ」

でも、むぎのん以下の他のＬｖ５は、罠とかにはめられず、先手を取れれば１００％瞬殺の一撃死できるレベル…かな？

「それって無茶苦茶強いのでは？と、ミサカはミサカはツッコミ入れちゃったりして！」

なんせ、【マルチタスク】脳力を始め、様々な技を隠したまま、【レールガン】と【発電容量】だけで、【第三位】をゲットした娘だし（＾＿＾；）？

日常生活しながら、マルチタスクで様々な【攻撃演算】や【戦闘シミュレーション】を、飽きる事なく繰り返してるしね（笑）

さて、暮灘的磨改造（笑）をされた”みこと”をされたいかがだったでしょうか？（＾＾；？

実は、暮灘的には一番楽しかったのは、新井里美さんが中の人の描写だったりして（笑）

ご意見ご感想は、作者の創作加速装置（笑）

いつでもお待ちしております（　）

第5話：とある二人の携帯番号交換（前書き）

皆様、こんばんわー☆

体調崩して、夕方まで寝てた暮灘です（＾＾；？

それでも、少し昨日の内に書いてたんで、何とか日付が変わる前にアップできそうで、何となく一安心です（笑）

今回の読みどころは…

前半は、ちょっとした【新キャラ（？）】がスポット参戦します♪

何気に【ジャッジメントの胸が大きなガネっ娘先輩】繋がりだったりして（＾＾；？

後半は、【意外とお洒落（笑）な上条さん】が出てきたり、”みこと”が【正統派ヒロイン】してたり（；＾＿＾Ａ？

というか、名前の変更で因果律が反転でもしたのか、ウチの”とうま”は、ホント”みこと”を構いたがるなぁ～と（苦笑）

こんな時間のアップですし、ただでさえ少ない【とある西多摩の学園都市】の読者様に読んで貰えるか激しく心配ですが、お楽しみ戴けたら幸いです（＿＿）

第5話：とある二人の携帯番号交換

夜、西多摩先端研究学園都市

刀磨（とうま）ｓｉｄｅ－

（やっぱ、犯人確保って事を考えると、２シーターは、キツイかな…？）

【スーパーレジェーラ】のステアリングを握りながら、俺こと上条刀磨は、そんなとりとめの無い事を考えていましたとさ。

ああ、念のために言っておくけど、２シーターってのは、【２座席】って意味な？

（４ドアとは言わないまでも、せめて後部座席は欲しいよなぁ～）

身柄を拘束した犯人だか容疑者だかを、助手席に乗っけて運転する度胸は、流石の上条さんだって無いでせう。

まさか、捕まえた連中を、車に乗せる度に手足の関節外す訳にはいかねーだろうし…

（【西多摩】は、道路事情いいしなぁ～）

まともに走れないとこなら、車の性能なんてのは、大して気にしなくて良いけど…

（カーチェイスを想定するなら、相応の車はいるか…）

「シークレット・インフォメーション・システム起動。生体認証システム開始」

一見すると、何も改造されてないように見える【スーパーレジェーラ】だが、実はそこそこいじられている。

例えば、左右のドア内部の内張り（ライナー）には、最新の防弾繊維が張り巡らされてるし、ウィンドはガラスよりも軽い表面が硬貨処理された防弾レクサン系樹脂。

拳銃の撃ち合いぐらいなら盾代わりになる、【軽防弾仕様】って奴だ。

それ以外にも、【カーオーディオ】等に偽装した（そして、カーオーディオとしても実際に使える）【ＥＳＭメンバー専用回線】に対応する通信機材が、搭載されている。

念のいった事に、このシステム、使用者以外が乗車してればそもそ

も起動せず、隠しカメラで常時モニターされる目の虹彩や網膜照合等の生体認証の後に、

「”イレイザー（消去者）・コード”【幻想殺し】。システム使用目的は、音声通信。コール先は、”装備”の【豆ダヌキ】」

『声紋合致。コード確認、一致。目的ト接続先ヲ確認。音声通信ヲ開始シマス』

と、最後はオートでなくてマニュアルでシーケンスしなければならない。

プリセットされた機械音声の対応を聞いた後、待つことしばし…

フロント・ウィンドを投影板に利用したホログラムＨＵＤに、【Ｓｏｕｎｄ　Ｏｎｌｙ】の表示が浮かび、

『いつもウルトラぷりちーな【豆ダヌキ】ちゃんやで～♪　【幻想】くん、どないしたんや？』

いきなり聞こえてきたのは、景気のいい関西弁が特徴の、女性の陽気な声だった。

「自分で、プリティーって（汗）　俺、【豆ダヌキ】の姐さんの顔、知らないんですけど？」

『アハハっ♪　それはお互い様やな☆　ほんで、こない時間にどないしたん？　【超軽量】が、ご機嫌斜めなんか？』

ちなみに、イタリア語で【超軽量】の事を示す言葉が、【スーパーレジェーラ】…つまり、俺の今乗ってる車の事だ。

「スーパーレジェーラは、至ってご機嫌ですよ。まぁ、車絡みの件なのは、確かなんですが…」

俺が【職務規程上の守秘義務】に抵触しないように事情を説明すると…

『事情は、ようわかったわ。今、《リスト》をあたってみるから、ちょい待っててな～♪』

【豆ダヌキ】の姐さんが検索してるのは、おそらく【政府保管になってる所有者不明、もしくは不在の車両】のリストだろう。

俺達のような”裏”だけじゃなく、”表”も含む様々な政府機関が押収、徴収、接収、差押え等の様々な手段で入手した【ワケ&いわく有りまくりの車】が記載されてるって奴だ。

『おっ、ちょうどエエ感じなんがあったで～♪　４ドア・セダンやけど、最高出力５２０馬力。３０７ｋｍ／ｈの最高速と、０→１００ｋｍ／ｈまでの加速所要時間４．６秒ゆう、中々の俊足っぷりや☆　これなら、高速でスポーツカー相手にガチで殺り合っても、そう悪くない勝負になるんちゃうかな？』

「確かに、悪くねぇですけど…んな都合のいい車って、あるんスか？」

『あんで～♪　その名も【アルピナＢ５ビターボ】や！　まだ、あんま市場に出回ってないモデルやけど、この間、密輸盗品取引の大捕物があってな？　その時に押収されたらしな～』

「”アルピナ”？　それって確か…【ＢＭＷ】の”チューナー”でしたっけ？」

【チューナー】ってのは、簡単に言えば市販車を改造するパーツや、原型より高性能にした改造車（コンプリート・カー）を製造販売するメーカーの事だ。

『そやで～♪　【アルピナ】は、本国ドイツやったら【チューナー】やのうて【自動車メーカー】として登録されてる会社やし、問題あらへんちゃうかな？』

改造車の怖いところの一つは、”一点豪華主義”的な改造に走り過ぎ、【車として性能破綻】する事が、ままある事だ。
極端な話、出力が二倍になって他がノーマルだったら、確実に運転がしずらい車になる。

（まぁ、姐さんの言う通りなら、心配ねーだろ…）

『いるんやったら、”装備調整”して回すけど？』

「あっ、できるんだったら是非とも」

『了解や♪　【豆ダヌキ】お姉ちゃんに、ド～ンと任せときぃ★』

さて、これで裏でも表でも【仕事】に使える”足”も確保できたし…

「そろそろ、”新居”に行くとしますかねぇ～」

（そういや、土御門がお隣さんだとか言ってたっけか…）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

翌朝…

「なんて言うか…似合わないな」

俺は、ジャケット姿…正確に言えば、ハーベスト・ブラウンのツィード・ジャケットに、シルクのクロス・タイ＆校章を刻んだプラチナ・シルバーのタイピンを組み合わせ、タータン・チェックのツータック・パンツをはくという、動きやすくて簡易防弾なんだけど、どことなくお坊っちゃま学校の制服くさい【ブリタニアの武偵養成学校（ＣＣＶスクール）】の制服を着た自分に、少しげんなりしながら、やるせない溜め息をもらした。

書類上、上条さんはブリタニアのＣＣＶスクールで【武偵免許】を取った事になってるから、必要な措置（小道具？）らしい。

（というか、タチの悪いコスプレにしか見えん…）

俺は、少しブルーになりながら部屋を出ると、

「よ～う、カミやん♪　おはよーさんだにゃー」

と、部屋を出た途端、暢気に挨拶して着たのは、いかにも適当な感じで学ランを着崩してる土御門だった。

「おはよーさん。というか、まさか待ってたとか言うなよ？」

すると土御門、ニヤリッと笑い、

「そのまさかさ。本日のご予定でも、お伺いしようかと思いましてねー」

（朝から元気な奴だなぁ～）

と思いはしたが、

「とりあえず、統括理事会直轄の【保安担当者】と面会して、【アンチスキル】の事務局行って、シューティング・レンジ（射撃場）の使用許諾を出してもらわねーとさ」

覚悟してはいたけど、学園都市は【銃を気兼ね無くぶっぱなせる場所】が少なすぎるからな。

（なんせ、民間の射撃場はないし、公共の射撃場は表向き警察とアンチスキルしかないって事になってるしな…）

本来、治安維持ってのは警察や公安、場合によっては軍なんて【武装の許された公的機関】が担当するもんだが、【西多摩先端研究学園都市】の場合は、少し事情が特殊だ。

街に公民問わずあらゆる分野の先端研究機関が集まり、情報学的に閉鎖的なコミュニティを作りがちな魔術師（ごく少数の魔導師も含む）や錬金術師も多く在住し、また近年は【法的定義が、未だにあやふや】な部分がある【最新の異能】である超能力者達もいる。

ぶっちゃけ、日本在住の【能力者】、いわゆりエスパーの半分以上が、この【西多摩】に集中してるとすら言われるのがココだ。

その複雑怪奇な権力構造や社会構成により、とてもじゃないが、【表の公的機関】の力だけじゃ手に余る。

勿論、大量の人員を投入し、人海戦術…数に任せれば、何とかなるかもしれないが、そうすれば今度は、公的機関の最重要配慮点である【公平性】に問題が出る。

いくら【西多摩】が、日本の国家戦略の根幹たる【魔法と科学の有機的最先端融合】を研究する、国内最重要拠点の一つだとしても、人手に限りのある公的機関の人員を集中するって事は、逆に言えば他に回される筈だった人員を奪うという事だ。

無論、そんな事は安易に許される訳はない。
そこで、苦肉の策として生み出されたのが【西多摩】限定で、暫定的な警察行動を許される半公的武装都市警備組織【アンチスキル】と、基本は【異能を持つ学生達】を中心として編成されるボランティア自警団の【ジャッジメント】だ。

「ほう…ジャッジメントには、顔を出さなくていいんかにゃー？」
「満足な武装も許されてない、【能力者狩り】専門っぽい、学生ボランティア治安組織相手に、上条さんにどうしろと？」
「にゃははー♪　眼中に無しってか？　でも、そう馬鹿にしたもんでもないぜよ。上の方には、かなりの”凄腕”がそろってんだぜ？」
「だとしても、だ」
なんつーか、目指すとこが違うんだよな～。
「簡単に言えば…上条さんは、【学生さん達の願う正義】とは、目的が違うって事でせう」
すると土御門、何やらニヤニヤしながら俺を上から下に見ると、
「ど～でもいいけど、カミやん…”馬子にも衣装”たぁ言うけど、その格好、いいとこのボンボンに見えるぜよ～♪」

…ほっとけよ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

さてさて、上条さんが朝の【西多摩】の街をスーパーレジェーラで流していると、

（おや？）

見慣れた…とは、言わねーけど、何となく見覚えのある後ろ姿を発見。俺は、車を横付けすると、

「”みこと”。良かったら乗ってくか？」

「助かっちゃったわ～♪　遅刻ギリギリだったのよ～」

うんうん。

助手席で、無邪気に喜ぶ姿が可愛いぞっと。
「ありがと☆　そして、おはよ。”とうま”♪」
「おはよーさん。それと、例には及ばねーぞ？　昨晩、付き合ってもらったしな。どちらかと言えば、その礼だ」
「えへへ～♪　そっかそっか♪」
ヤバい…
本気で可愛いんですけど…
「制服着てるって事は…”とうま”も、これから学校？」
と、”みこと”は小首をかしげた。
「いんや。”コッチの高校”への編入は、４月からさ。コイツは”前の学校”の制服だ」
「へぇ～、そうなんだ？…結構、似合ってるじゃない？」
ホントかよ？
「そっかあ？　何となく金持ちボンボン臭くて、俺はあんま好みじゃないんだが？」
上条さん的には、ジーンズにGジャン、Tシャツにスニーカー…みたいなノリの方が好みなんでせうが。
とはいえ…

「【西多摩】じゃあ、”制服”の方が何かと動きやすいって聞いてるしなぁ～…」

と、ぼやく俺に”みこと”は、クスクス笑いながら、

「お世辞じゃなくて、いい線いってるって思うわよ？　そうね…放課後の【学舎の園】だったら、３０分に一回は逆ナンされるんじゃない？」

ご冗談！

「こちとら”現役高校生武偵”だぜ？　お嬢様の優雅な放課後ティータイムに付き合う時間なんざ、そうそうありゃしませんって」

その言葉に、”みこと”はフ～ンって言いたげな顔で、

「そうそうって事は、少しは時間があるって認識していいって事かな？」

「まぁな。いくらなんでも２４時間体制で忙しいなんてことは、ありゃしないって…ないといいなぁ…」

俺が”過去の不幸の実績”を思い出して少しブルーを入れると、”みこと”はケラケラ笑いだし、

「なぁにそれ？　じゃあさじゃあさ、”とうま”の携帯番号とか聞いちゃっていいかな？」

何のつもりか知らないけど、

「別に良いぜ？」

俺はポケットから真新しい携帯を取り出し、そのまま”みこと”に手渡した。

「ちょ、ちょっと！　普通、携帯ごと渡す？」

何故か焦る”みこと”だけど、

「運転中に携帯いじるのは、違法です。それに、買ったばっかの奴だから、見られて困るようなデータも入れてないしな」

まぁ、正確には【天河らーめん】で、”身分詐称の偽造書類一式（第1話を参照）”と一緒に渡された、【現役高校生武偵の上条刀磨】の携帯だしね。

「わかったわ。え～と…ここをこうやってっと…」

携帯をいじりまわしてしばし…

「で～きたっと♪」

”みこと”は、携帯の画面を見せて、

「私の番号も、入れといてあげたわよ☆」

第5話：とある二人の携帯番号交換（後書き）

皆様、ご愛読ありがとうございましたm（__）m

何とか日付変更前にアップでき、ホッとしてる暮灘です（^^；？

「ミサカもミサカも、本日は間に合わないと思っていました（汗）」

ちなみに、新キャラの【豆ダヌキ】の姐さんは、【固法美偉】先輩と中の人（笑）繋がりで、【バカ努力世界】の”あの人”ですな（^^；？

ちなみに、【表の本業】は、在宅で不自然さが出ないように”作家”さんらしいです（^__^；）？

「それにしても、存外自重しない、トーマに、ミサカはミサカは驚きを隠せなかったりして♪」

原作のイメージを残しながら、【明確に運命の変更を印象付けよう】としたら、何故かこんな事に（^^；？

「しかも、ミコトもかーなーり積極的だとミサカはミサカは、指摘しちゃったりして☆」

まぁ、命に関しては、どちらかと言えば、まだ”とうま”に関する興味が半分、”現役高校生武偵”に関する興味が半分って感じかな？

まぁ、原作美琴も好奇心旺盛だしね～♪

さて、なんか登場キャラ（豆ダヌキ、土御門、命）のせいか、全体的にほのぼのとしたエピソードになってしまいましたが、いかがだったでしょうか？（＾＾；？

次回は、【とある】系のキャラクターとエンカウト？

では、またお会いできる事を期待しつつ…

ご意見ご感想は、作品の栄養ッス♪

いつでもお待ちしております（__）

第6話：とある刀磨のハンド・カノン（前書き）

皆様、こんばんわー☆

なんか、徐々に執筆の勢いが落ちて焦ってる暮灘です（^^；？

さてさて、今回の読みどころは…

序盤は、いつも通り”とうま”と”みこと”が、軽くイチャイチャしてます（笑）

というか、【西多摩】って初々し過ぎて色気がないなぁ～（^^；？

その分、【武偵高校】が羽目を外しまくってるって噂がありますが…

中盤は、【脇役の代表格】的なおねーさま二人が登場（o^―,）b☆

なんせ、様々な【とある】シリーズのSSでも、この二人が出てくるシーンはレアなので、つい書いてみました（^^；？

あと、原作ではあまりない【武器を使いこなす”とうま”】って言うのも描いてみたかったんですよねぇ～♪

【ナクオン（ナックル・オンリー）】に”漢の美学”を感じるのが、

原作当麻の魅力なら、正反対の【ガンスリンガー（銃使い）】っぷりを刀磨で表現してみたくなりまして（^^；？

ラストは、チラッと【とある科学の超電磁砲】でお馴染みの二人が出てきたりして（笑）

え～と…次回の伏線かもしれないッス（^＿^；）？

では、原作とかなり毛色の違う展開ですが、どうぞお楽しみくださいm（＿）m

第６話：とある刀磨のハンド・カノン

【学舎の園】
五つのお嬢様学校が作る共用区域。
敷地は、並みの学校の１５倍以上。
周囲は、治安維持を名目に、部外者の侵入を防ぐ為に高い塀にぐるりと囲まれ、更に出入りはゲートで厳重に管理されてる。

内部は、【地中海に面した南欧州の伝統と格式ある街並み】をモチーフとした造りになっていて、学校だけでなく居住施設や研究施設、数多くの商店が立ち並び、小規模ながら【街】を形成してる。

【街】を形成するのに必要な物を必要なだけ詰め込み、全体に２４００台を越える監視カメラを配備した【お嬢様な能力者】を”純粋培養”する為に作られた、人工の【箱庭】もしくは【培養槽】…

（俺なら、確実に息がつまるねぇ～）

なんて事を考えながら、【学舎の園】のゲート近辺で、スーパーレジェーラをお上品に減速させる。

だって一応、運転手付きの高級車に乗り慣れてる（予想）だろう、お嬢様乗っけてるしな～。

「”とうま”、どうしたの？」

「いや、お嬢様ってのも、色々大変なんだなぁ～ってさ」

「ん？　何が？」

”みこと”は、不思議そうな顔をするけど、

「何となく…な？」

と、返しながら俺は車を止める。

「ふ～ん…」

”みこと”は、ガチャとドアを開け、降り際に振り向き、

「”とうま”…その、電話とかメールして…いいんだよね？」

ん？

電話番号やメアド渡すって、そういう意味じゃないのか？

「ああ、勿論。いつでも出れる訳じゃないし、直ぐに返せるとは限らねーけど、それで良ければならな」

「十分じゅ～ぶん♪　それじゃあ、”またね”☆」

「ああ。”またな”」

そして、俺はゲートの奥に消えていく、”みこと”の華奢な背中を見送った。

（まさか、【西多摩】で最初に番号やメアド交換するのが、天下のお嬢様だとは思わなかったけど…）

たまには、こういうのも悪くないよな？

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

【アンチスキル】第７３活動支部
応接室

「へぇ～っ。お前さんが、【上】から通達のあった【高校生武偵】じゃん？」

刀磨からの書類を受け取ったのは、尻まで伸びた黒髪と大きな乳が印象的な、抜群のスタイル&長身、そして、それらの要素とミスマッチなはすっぱな口調の妙齢の美人だった。

「ええ。【上条刀磨(かみじょう・とうま)ッス」

「【黄泉川愛穂(よみかわ・あいほ)】じゃん。見ての通り【アンチスキル】の隊員。ついでに言っておけば、お前さんが通う予定の高校の教師でもあるじゃんよ」

その台詞を聞いた刀磨は苦笑し、

「お手柔らかに。”黄泉川先生”」

しかし、黄泉川は豪快にカカカッ！と笑い、

「そうはいかないじゃんよ～♪　【武偵】だってんなら、ビシビシいっても大丈夫そうじゃん？」

「それ、めっちゃ偏見ッスよ（汗）」

そして、書類作業や手続きを一通り終えた後、

「早速ですけど、シューティング・レンジ（射撃場）を使わせてもらっていいッスか？」

「へぇ。ヤル気満々じゃん♪」

からかうような口調の黄泉川に、刀磨は真面目な顔で、

「昨日は、【ドライ・ファイヤ】しかやってないもんスから…」

【ドライ・ファイヤ】とは、実際に銃弾を銃に装填しないで構え、イメージする標的に【空撃ち】することで、一種の【射撃イメージトレーニング】を行うことだ。

「感覚が鈍らない内に、実弾射撃をやっておきたいんスよ。切った張ったの丁丁発止（ちょうちょうはっし）が日常の【武偵】には、割と切実ッス」

「学生のわりに、しっかり”プロ”してるじゃんよ…んで、どんなエモノ使ってるじゃん？」

黄泉川の言葉に、刀磨は、ツィード・ジャケットの左側をはだけさせる。

ジャケットの下に肩から吊り下がるショルダー・ホルスターに収められてた、大柄なリボルバー・タイプの拳銃を見た黄泉川は、ヒュ～♪と口笛を吹くと、

「コリャまた随分、立派なモノぶら下げてるじゃんか♪」

微妙にコメントがエロかった（笑）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

第１７活動支部内、
屋内射撃場

「ふにゃ～ん！　反動がキツいですぅ～（泣）」

メガネと後ろで纏めたクセッ毛がトレードマークで、二十歳過ぎても【ドジッ娘】という表現が似合ってしまうアンチスキルの女性隊員、【鉄装綴里（てっそう・つづり）】は、義務訓練の【拳銃射撃】に、半分ぐらい泣きが入っていた。

彼女の使う拳銃は、ドイツのＨ＆ａｍｐ；Ｋ社の【ＨＫ４５】という軍用自動拳銃で、元々は特殊部隊用に設計とデザインされただけの事は有り、かなり高機能＆高性能な軍用拳銃だ。

ただし、使う弾丸は、【４５ＡＣＰ】弾…通称”４５口径”と呼ばれる、直径１１．２３ｍｍ（０．４５インチ）という、今時の軍用拳銃弾としては、大口径ハイパワーの弾丸を使う。

鉄装としては、アンチスキルに許されてるもう一つの標準拳銃…もっと口径が小さい、９ｍｍパラベラム弾（通称”９パラ”あるいは”９ｍｍ”）を使う為、反動がマイルドな、同じくＨ＆ａｍｐ；Ｋ社の【Ｐ３０】を使いたかったのだが、先輩の黄泉川の、

『マン・ストッピング・パワーなら、９パラより４５口径のがある

し、信頼できるじゃん？　それに、私とマガジン（弾倉）交換できないと、いざって時に困るじゃんよ？』

の言葉で、決められてしまったのだ。

ちなみに４５口径は、一般的な女性が射撃を行うには、かなり反動が強い部類の弾だったりする。

鍛えてるとはいえ、標準より小柄な鉄装には押して知るべしである。

それはさておき、本日の射撃訓練ノルマを終えた鉄装が、見た目はヘッドホンに見えるが、機能は真逆に室内だと反響しまくりの銃声から耳を守るイヤー・プロテクターを外した途端、

”ズドゥーーン！！”

「きゃん！」

普段、聞きなれてる４５口径や９パラと全く異なる…遥かに長く重く響く、銃声と呼ぶには大きすぎる音に、鉄装は思わず小柄な体を跳ねさせる。

”ズドゥーーーン！！”

再び響く迫力の大音響！

涙目になりながら、鉄装が銃声の音源の方を向くと…

「…ほぇ？　学生…さん？」

鉄装は、思わずキョトンとしてしまう。

そりゃそうだろう。

まず、学生がアンチスキルのシューティング・レンジにいること自体が異常だが、それにもまして自分の使うＨＫ４５より、明らかに大きくいかつくハイパワーなリボルバー・タイプの拳銃を、”片手”で軽々と撃ってるのだ。

ちなみに鉄装に限らずアンチスキルの隊員は、必要がない限り、必ず両手で構えて拳銃を撃つように指導されている。

そんな風に鉄装が呆然としてると、

「あのボウヤ、大した腕前じゃんよ♪　まさか、２５ｍ（この屋内射撃場の最大距離）で、まさか片手撃ちで６発全弾、ブルズ・アイ（ど真ん中）に命中させるとは、思わなかったじゃん」

「黄泉川先生…」

いつの間にか背後に立っていた黄泉川に、

「あの子、何者なんですか…？」

「”上条刀磨”。上が言ってた、高校生なのに【武装偵護官】やってる奴じゃん」

「ほぇ～っ…あの子が、噂の【現役高校生武偵】くんですかぁ～」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

刀磨ｓｉｄｅ－

（まぁ、こんなもんかな…？）

相棒（それとも、”愛銃”か？）の【ガード・ブレイカー（防御殺し）】の調子は、悪くない。

【ガード・ブレイカー】
米国のスターム・ルガー社の大口径リボルバー【スーパー・レッドホーク】を叩き台に、特注の５インチ・ブルバレルを装着し、フレームを延長してオプションを装着し易くするピカンティニー・レールを装備すると同時に、バレル（銃身）を共振での精度の悪化を防ぐフローティング・マウントにした、俺専用のカスタム・モデルだ。

他にも、サイトが３ドットのコンバット・フィクスド・サイトになってたり、グリップが俺の右手に合わせた特注のそれだったり、トリガーがシングル・アクションの時は、フェザー・タッチまで引き

を軽くしてあったりと色々イジってあるけど…

（まぁ、要するに原形に比べて、撃ちやすく当てやすいって事だな…うん）

使用弾は、【４８０ルガー＋Ｐ】弾。
名前の通り、直径０．４８インチ（１２ｍｍ）の弾丸だ。

蛇足だけど、”＋Ｐ”ってのは、Ｐはパワーの略で、【強装弾】って意味。
文字通り、威力はかなり強く、そうだな…例えば、有名な【４４マグナム】の１．５倍弱の重量の弾丸を、同じスピードで発射できるって言うと、分かりやすいかな？

アンチスキルの４５口径を基準にするなら、単純な運動エネルギー換算で、実に４倍にもなる。

（４４マグナム以上の威力の拳銃は、俗に【ハンド・カノン（または、ハンド・キャノン）】って言われるけど…）

【ガード・ブレイカー】は、まさにその【ハンド・カノン】だ。

（もっとも、通常弾を使う機会なんざ、殆どないだろうけどな…）

【武偵】の基本が、”生け捕り”である以上、胴体なら何処に当たっても”人体破壊”しちまう４８０ルガー弾なんて、そう易々とは使えない。
なんせ、当たり所が良ければ、ヒグマだって一撃で殺せる弾だ。

当然、【相手を殺さない】用に作られる弾丸もある。

その一つが、【非致死性（Ｎｏｎ－Ｋｉｌｌｉｎｇ：ＮＫ）】弾だ。【ＮＫ弾】ってのは、簡単に表すと【メチャクチャ重くて、粘土みたいに柔らかい金属】を、特殊なプラスチック弾殻に封入した弾だ。目標に当たると弾殻が壊れて、中身の超軟性金属が潰れ広がり、運動エネルギーそのままに、ベチャッと体に張り付くって寸法だ。

簡単に骨ぐらいは折れっけど、皮膚を食い破って筋肉を貫通し、骨に当たって体内を跳ね回り、内臓をズタズタに引き裂いて大量出血…なんて事には、まずならない。

ちなみに、銃で撃たれた死因の大半は、頭や心臓なんかの致命的箇所に直撃されるか、さもなくば出血だ。

俺は、【ガード・ブレイカー】をチェックした後、左肩から吊るしたショルダー・ホルスターに戻し、

（ついでにコイツのチェックもしておくか…）

と、左手首を捻る。

すると、

”チャキン！”

カフスライド・ホルスターに従い、袖口から手の平サイズの小型４５口径自動拳銃…米国キンバー社の【ウルトラＣＤＰ２】が滑り出

してくる。
俺は、銃口を標的に向け、引金を絞る。
”タンッ！”
音と反動の小ささに比例して、威力も前述のように低いけど…
（まぁ、”エマージェンシー・ガン”としちゃあ、十分かな？）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

第17活動支部の近辺
定食屋【うまかもん！】

「学生さんが、あんなおっきな拳銃を、片手でバンバン撃つなんて驚きですよ～！」
「は、はあ…」
俺は、興奮気味のガネっ娘に少し呑まれていた（汗）

とりあえず状況を説明すれば、実弾射撃を終えた上条さんは、黄泉川さん（黄泉川先生？）に、支部近くの定食屋に、昼飯に誘われたのだった。

その時に合流したのが、鉄装綴里さんという黄泉川先生のガネっ娘後輩だったってわけ。

「それを言うなら、鉄装さんの方が凄いじゃないですか？　まだ、”高校生”ぐらいなのに、アンチスキルやってるなんて」

「ほぇ？」

何故にそこで固まる？

って、まさか…

「もしかして…まだ、中学生だったりするとか？」

「ちっ、違いますっ！　わたし、これでも先生！　教師ですっ！！」

「うそん…」

どう上に見ても、精々俺と同年代、年下って方が自然に思えるんだけど…？

「ぶわっはっはっはぁ～～っ！！」

「黄泉川先生、笑いすぎですっ！！」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

時は流れ、午後４時前後
第７学区某所

『”佐天さん”、強盗の残りは、そっちに追い込んでます』
レシーバー越しから伝わる【バックス】詰めの相方の声に、長い黒髪の少女は、
「あいよ～、”初春”。この佐天姉さんに任せておきなさいって♪」
と、陽気な調子で答える。
そして、”会敵タイミング”がカウントダウンに入った時…
「”佐天瑠威子（さてん・るいこ）”…」

一つ大きく深呼吸すると…

「推して参る…！！」

第6話：とある刀磨のハンド・カノン（後書き）

皆様、ご愛読ありがとうございましたm（__）m

今回は、かなりエピソードのまとまりが悪くて、中々アップができなかった暮灘です（^^；？

「ミサカはミサカは、かなり危機的な乱雑思考っぷりだったと暴露しちゃったりして♪」

いや、今回は本当は後半は、【超電磁砲】の残り二人のシーンを入れようとしたら、中途半端になってしまって（^^；？

「つまり、中盤のアンチスキルのおねーさん二人にシーンを取られてしまったと、ミサカはミサカはツッコミ入れちゃいます♪」

はい、その通りで（^^；？

まぁ、でも次回の伏線は入れられたのは、良かったかなっと（；^—^A？

原作と大分、雰囲気の違う話になりましたが、皆様いかがだったでしょうか？（^^；？

次回は、少なくとも前半は【佐天、舞う！】的な展開になると思います（o^—,）b☆

それでは、再びお会いできる事を祈りつつ…

ご意見ご感想は、作品と作者の糧ッス♪

いつでもお待ちしております（__）

第7話：とある佐天の魔改造（チートプレイ）（前書き）

皆様、おはよーございまーす☆

実質的に、本日二度目の投稿となります、暮灘です（＾＾；？

いや～、前話（第６話）と打って変わって、異常に筆が進んだのと、今日はかなり忙しくなりそうだったので、つい頑張ってみました（笑）

このＳＳを読んでくださる全国の佐天ファンの皆様、お待たせしました（＿＿）

今回のエピソードのコンセプトは、ズバリ！

【チートな佐天さん】、【格好いい佐天さん】と【萌え佐天】の三つですっ！！（ｏ＾－，）ｂ☆

ぶっちゃけ、今回は全編、佐天さんしか出てこないようなもんです（苦笑）

実は暮灘の中で、佐天さんは原作【超電磁砲】の中でも、美琴と1、2を争う好きキャラで、一度好きに【愉快な魔改造（スーパーチート化）】してみたかったんですよね～♪

そして、書いてる時…暮灘自身、不覚にも萌えてしまいました（笑）

この作品の佐天さんは、間違いなく原作と同じ【レベル０】でしょう。
でも、同じく間違いなくチートです（笑）

原作と同じく【能力者】を斜めに見てます。
でも、目線が大分違います。

暮灘的には、【佐天瑠威子】という原作と違う運命を持つ【佐天さん】は、【とある西多摩の学園都市】の”準ヒロイン筆頭”、もしくは”裏ヒロイン”と考えてます。

それも、決して主人公（刀磨）となびかない類いの…

その意味は、本編で察して頂ければ…（黒子がちょっと可哀想かもですが）

以上の【まえがき】で、興味を持たれた方は是非とも読んでみてくださいませ（＿＿）

【とある西多摩の学園都市】の中で、書いてて今までで、一番ノリノリだった話でだったりしますので（^__^;）？

第7話：とある佐天の魔改造（チートプレイ）

【西多摩先端研究学園都市】、第7学区某所
放課後

（さ～てと…）

微妙に姫カット（？）の絹糸のように長く美しい黒髪に、ワンポイントに【白い撫子】の花飾りのついたヘアピンをあしらった少女は、細長い布袋から三折りの”弓”を取り出した。

その弓の折り畳み構造は、洋弓（コンパウンド・ボウ）に近いが、その朱塗りの本体の造りは、純和風の長弓…

「ふふふ～ん♪」

少女は、器用な手付きで弓に弦を張り、調子を見るように軽く弦を弾いてみる。

”ビィィィン…”と、その共鳴するような振動を、耳だけでなく全身で感じるように、感覚を研ぎ澄ませていた少女は…

「よしっ！　行ける…！」

その一連の準備が終わった時、まるでタイミングを合わせるように、

『”佐天さん”、強盗の残りは、そっちに追い込んでます。数は変わらず三人。人質は、今のところいません』

耳につけた携帯端末としても使えるレシーバーから、【バックス（後方指揮所）】詰めの相方より、”作戦決行”まで間がない事を示す通信が入った。

「あいよ～、”初春”。この佐天サンに任せておきなさいって♪」

と、少女は陽気で快活な声で答える。

そして、”出撃”が、カウントダウンに入った時…

「”佐天瑠威子（さてん・るいこ）”…」

一つ大きく深呼吸すると…

「推して参る…！！」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

佐天ｓｉｄｅ－

『佐天さん、相手はレベル２とは言え、全員が【能力者】です。それに、白井さんの報告だと…』

「はいはい、わかってるわよ。例によって、【バンク】に登録されてるデータと誤差…要するに、より強いって事でしょ？」

私は、”会敵ポイント”に走りながら、初春に答える。

それにしても…

（初春だけじゃないけど、なんで【ジャッジメント】とか【能力者】って、全般的に…）

バンクに登録されてるデータを、無条件で信じたがるんだろ？

（能力者が全員、能力開発と測定が義務付けられて、受けてるから…とか？）

バカを言っちゃいけないっての！

法を犯すような連中が…戦う事を前提としてる連中が、

（易々と、自分達の手の内を見せるとでも、本気で思ってるのかな

？）

もっとも相手は、【本物のプロ】じゃなさそうだし、そういう認識でも良いのかもしれないけどさ…

【最新の異能】である”能力者”に関して、【西多摩】は露骨に”レベル至上主義”って側面を取ってるから、レベルが上がれば有頂天になって、子供がオモチャをみせびらかすみたいな感じで、無造作に力を使いたがる”馬鹿能力者”は、実際、掃いて捨てるほどいる。

（今回も、そんな能天気な連中みたいだから、楽っちゃ楽なんだけどね～）

正直、私は”身内”を除く【能力者】に、あんまり良い感情は持ってない。
だって…

（”私達”に比べると…）

「”能力（ちから）”に関する認識が、まるっきりガキなんだもんっ！！」

【能力者】が犯罪を行う場合、大体、一つの【ステレオ・タイプ（凡例）】が存在する。

簡単に言えば、

【凄い力を持っている筈なのに、周りは何故、認めてくれないっ！？】

なんて思うタイプだ。

【パーソナル・リアリティ】の獲得で、せっかく得られた能力かもしれないけど、ここは天下の【西多摩】。

レベル3以下の能力者なんて、”一山幾ら”って感じでいる。

それで、自分の能力を”自己過大評価”した【低レベルの能力者】達は、”自分達は、もっと評価されていい筈”って思考を、”自分達の力をもっと認めさせたい”って、より攻撃的で狭量な方向にシフトさせ、分かりやすく直線的に力を振るう手段…つまり【暴力的な能力の行使】、”犯罪”に手を染めるってのが、定番だ。

そんな理由で、【能力持ちの犯罪者】の大半が、世間の評価に不満を持つ【低レベル能力者】ってのが、お決まりのパターンなのだよ。

（まぁ、それは【西多摩】の体制にも、問題はあるんだけど…）

さっきも言ったけど、研究機関が集中してる【西多摩】は、今は最新の異能である【超能力】に興味津々で、企業や学校のスポンサーも、どんどんお金を出す。

そして、それが資金源の能力持ちの学生達に支給される【研究協力助成金】…口の悪い、あるいはストレートな人が言うところの【モルモット育成費】も、レベルごとに雲泥の差がある。

それどころか、通う学校にすら差が付けられるのだ。

例えば、数少ない私の尊敬する能力者で、大親友で、ついでにちょっとした【ナイショの百合っ娘関係（はぁと♪）】だったりもする、実は甘えん坊な【御坂命】さんが通うお嬢様学校の【常盤台】なんて、『レベル３以下は、王候貴族だろうと入学を許さない』って徹底ぶりだ。

あっ、ちなみに期待させといて悪いけど、私と【ミコト（二人きりの時は、お互いに呼び捨てなのさっ♪）】は、生憎、白井さんみたいに”ガチ百合”じゃないわよ？

お互い、ちゃ～んと男の人も好きだし、なんたって二人揃って、処女だしね～♪

って、それはそれで、お目当ての相手がいないって言い切ってるみたいで、なんか虚しいけど（汗）

と、とにかく精々、人目のない所で、ちょいと濃厚なキスしたり、山籠りじみた【修行（ミコトがよく一緒について来るのだよ☆）】の時に、二人一緒に一枚の大きな毛布にくるまって（下着だったり全裸だったり♪）、口移しでポッキー食べたりしながら、ひたすらイチャベタ（笑）するぐらいかな～？

要するに、お互いの憧れと友情と好意の延長線上にある関係…って、感じだと思うよ？

それはともかく…

（”私達”みたいに、何百年も前から、お上に頼らない…というより、【織田幕府】成立までは、お上に隠れ、半ば秘密結社化した相互扶助目的の地下コミュニティがあった訳じゃないから…）

同情すべき点は、多々あるけど…

でも、それでもさ…

（自己評価と世間の評価とのギャップを処理出来なくて、それを能力の行使…暴力で世間に存在をアピールするなんて、）

「駄々っ子かっつーの！！」

だから、私は今日も”大きなお友達”ならぬ【大きな駄々っ子】をふん捕まえて、二度と悪さ働く気が起きなくなるぐらい、尻を叩かないといけないって訳なのだよっ！！

…って、誰よ？

今、『俺達の業界では、ご褒美です！』って言ったのはさ？

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

（3、2、1…）

私は、初春のナビゲート通りに、裏路地にチンケな強盗三人の逃げ道を塞ぐよう、私は飛び出るっ！

「”ジャッジメント”なのだよっ！　大人しく投降するなら、それもよしっ！　さもなくば、ちょ～いと痛い目に合ってもらうよ～ん☆」

左手に朱塗りの長弓を握り、右の肩口近くに巻いた【”緑の盾”の腕章】を見せ付けると、

「「「……」」」

いかにも、【俺達、ストリート・ギャングです】って感じの三人が固まった…

私に恐れをなした…って言いたいとこだけど、なんか様子が変だねぇ？

「「「みっ、巫女さんっ！！？」」」

「へっ？」

私は、思わずその予想の斜め上のリアクションに、キョトンとしてしまう。

いや、確かに今の佐天サンは、紅白の典型的な”巫女服”に身を包んでますよ？

だって、私の【戦闘服（コンバット・ユニフォーム）】ですから。

（だからって…）

なんなのよ？

その、微妙な驚愕の表情は…？

「お、俺、実は激しく巫女萌えなんだ…」

はいっ！？

なに唐突に、とんでもないカミング・アウトしてんのよっ！？

「あ、あの質問ッス！　巫女服の下は、スッポンポンって本当ッスかっ！？」

「あっ、うん。他の巫女さんは知らないけど、私はスッポンポンだよ？」

あっ、ヤバ！

質問が想定外過ぎて、つい素で答えちまったい！

いや、それにもちゃんと、禊（みそぎ）の儀式なんかの霊装的な意味があって

だね…

「つか、三人揃って前屈みになるなっ！！」

「み、巫女さんがなんで”ジャッジメント”なんてやってるのか知らないけどさ…つまらねーことしねぇで、俺達と一緒に逃げようぜ！　なっ！」

「そ、それで四人で一緒に…」

「勿論、巫女服は半脱ぎの着衣プレイで…」

なんか好き放題に自分勝手な事を言ってるけど…

「あんね～…ンな事、出来るわけないっしょ？　第一、この佐天サンは優等生だってーの」

「な、なら力づくで死なない程度に痛めつけて…」

ほ～う…

いよいよ、本性出しやがりましたか…

「お持ち帰りするっ！！」

…リーダー（多分ね）の巫女萌えは、どうやら”本物”みたいだわ（汗）

ツッコミ所は多々あれど、私はジャッジメントの腕章を巻いた右腕を腰に当て、呆れたように溜め息を突きながら…

「しょうがないなぁ…」

私にどうしても、この台詞を言わせたいのかね？

私は、挑発的な笑みを浮かべて、西洋魔術師なら【魔法名】を言うべき所で、

「じゃあ…」

【鏑啖呵（かぶらたんか：戦始めの決め台詞）】を言い放つ！

「みっこみこにしてやんよっ！！」

だから、なんでそこで幸せそうな顔になるかなっ！！？

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「み、巫女さんよぉ…アンタ、弓だけで矢はねぇみたいだけど、そ、それでどうするんだよ？」

だから、なんで顔を紅くしながら目線を逸らしながらチラチラ見て、しかもどもるのよっ！？

「こうすんのよ♪　【消魔の弦】…！」

”ビィィィン…”

私が朱塗りの長弓の弦を弾くと、

「「「きっ…消えたっ！！？」」」

「畜生っ！　光学操作系の能力者だったのかっ！？」

（能力者じゃないっつーの…）

この佐天瑠威子サンは、何を隠そう立派な”日本神道”系の【東洋魔術師】だいっ！

（ったく、なんで能力者って、【不思議現象】が起きると、なんでもかんでも同じ能力者だと思うのかねぇ～）

【物理現象をパーソナルイメージと演算で、”書き換える”】のが超能力なら、【物理現象を魔力と術式で”歪曲”】するのが魔術な

のだよ。

”私達”みたいな”魔術師〝は、常に相手の能力なんかを先入観無しで分析するように訓練されるし、ついでに言えば【バンク】の情報も鵜呑みにしないで、”目安”程度にしか考えていない。

（魔術師の戦いは、術式の読み合い、潰し合いが基本だしね～♪）

いかに敵に悟られないように、こちらの得意＆必殺の術式を相手より先に叩き付けられるかが、肝になるのだよ☆

だから、己の技や術式は、可能な限り隠そうとするから、いざ戦ってみたら、事前情報と違ってた～なんて話は、ざらにある。

例えば、能力持ちのチンピラーズは、私を勝手に光学操作系と勘違いしてくれてるけど…

（実は、佐天サンは【風の術式】を、もっとも得意としてるんだなぁ～☆）

彼ら風に言えば、【気流（気体）操作系】ってのが一番ちかいんだけど、私の力はもうちょい融通が効く。

例えば、今使ってる【消魔の弦】って術は、科学的な解説をするなら、【大気中の水分子を操り、光の位相を揃えたり分散させたり屈折率を変えたりしてる】らしい。

これに”擦り足”の親戚みたいな”静音歩法”を合わせれば、大抵の能力者に近づくのは、容易い。

そして、キョロキョロしてるチンピラーズに思い切り接近した所で、

「【衝打の弦】！」

”ビィィィン…”

私が、弦を鳴らした途端…

”ゴォォォーーッ！！”

冗談みたいな大きさと威力の”共鳴振動衝撃波”が、三人を飲み込み、

「「「ふんぎゃあぁぁぁーーーっ！！？」」」

哀れチンピラーズは、脳内演算する前に、壁やら地面に叩き付けられまくり、ボロ雑巾みたいになって沈黙しましたとさ。

めでたしめでたし♪

あっ、もう分かったと思うけど、私が握ってる”朱塗りの長弓”は、ただの弓じゃなくて、【梓弓（あずさゆみ）】って言う、立派な日本神道の【霊装】

なのだよっ♪

ちなみに、私が巫女服の時に下着を付けないのは、残念ながらせくすぃー路線（笑）狙ってる訳ではなく、せっかく梓弓をパワーアップさせる為に禊…水ごりで清めた体なのに、余分な物を付けたら効果が落ちるからだよ～♪

今は、魔導書探しの旅に出てる【師匠】なら、些細な話だろうけど…

（まだまだ未熟な佐天サンとしては…）

使える手段は、全部使わないとネッ！☆

第7話：とある佐天の魔改造（チートプレイ）（後書き）

皆様、ご愛読ありがとうございましたm（__）m

最近、【西多摩】を続けてく事に、不安を感じ始めた暮灘です（^^；？

「書いてる時はノリノリだったのに、今はひどくネガティブだと、ミサカはミサカは指摘してみるのです☆」

いや、ある意味、その反動なのかもしれないけどさ…

でも、【西多摩】って【とあるシリーズ】のファンの読者様に、どう受け止められてるのか、少し心配になってね（^^；？

そりゃあ、SSってのは本来、自己満足の世界だし、書いてる暮灘が楽しめればそれで良いのかもしれないけど…

でも、読者様あっての作品だからね（^__^；）？

出来れば、読んでいただける読者様にも楽しんで頂ければなぁ～と（汗）

「暮灘も暮灘なりに色々考えてるのだと、ミサカはミサカは少し関心しちゃったりして♪」

まぁ、処理速度や容量の足らない頭ではあるけど、それなりにね（；^__^A？

「話はガラッと変わりますが、佐天が巫女で東洋魔術師で、ついでにお姉様とタテとネコの関係だった事に、ミサカはミサカは強いインパクトを感じました！」

タテとネコって（＾＾；？

黒子じゃないんだから、そこまでダイレクト・アタック（笑）な物じゃないって（＾＿＾；）？

原作でも、【クレープ屋のゲコ太イベント】や【かき氷の食べ比べ】、【レベル・アッパー事件の時の後悔】や、頂点はテレスティーナ木原との最終決戦直前の【貴女は一人じゃない】イベント…実は、原作での美琴と佐天の絡みってメチャクチャ多いんだよ。

美琴＆初春のからみよりずっと多いのは当たり前で、【超電磁砲】TV版ラストの方じゃ、初春に【なの】な娘が出てくるから、余計に美琴と佐天が近くなったような妄想が（笑）

だから、【西多摩】の二人の関係は、その延長線上にあると思って貰えれば（；＾＿＾A？

「でも、それにしてもラブラブだと、ミサカはミサカはツッコんじゃったりして♪」

裏設定だけど、佐天さんが思ってる以上に、命は佐天さんを尊敬してるんだよ。

四人娘唯一の魔術師ってのもあるけど、何より【戦う存在】として

ね。

実は、四人の中で一番、実戦経験があるのは、佐天さんだったりするんだ。

なんせ、師匠が師匠だし（＾＾；？

「超実戦的な梓弓の使い手ですからね☆」

紙面も尽きてきましたが、皆様、魔改造な佐天さんは、いかがだったでしょうか？（汗）

では、またお会いできる事を祈りつつ☆

第8話：とある巫女（？）のデリバリー・ピザ（前書き）

皆様、こんばんわー☆

佐天さんの【ライト百合っ娘】発言に、誰もツッコミを入れない事に驚いた暮灘です（＾＾；？

自然に読者様に受け入れられたと自惚れていいんでしょうか？（汗）

今回も、サブタイ通りにメイン・ヒロインは佐天さんで、追跡劇のアフター・ストーリー（笑）ですね～♪

「ジャッジメントですの！」なツインテ（笑）との掛け合いも好きなんですが、何気に名前は出てきませんが、回想でチャッカリ、少し（かなり？）人当たりの柔らかくなった原作の【二人目の主人公】が出てきます（＾＾；？

しかも、意外な人物を引き連れて（笑）

佐天さんの所属してる”ジャッジメントのセクション”や、白髪さんとの関係等が出てきまして、何となく【この世界の学園都市】の輪郭が、朧気に浮かんでくる話になっております（＾＾；？

原作ブレイクにも程がある展開ですが、どうぞお楽しみください（o^―,）b☆

第8話：とある巫女（？）のデリバリー・ピザ

第7学区某所、放課後
大捕物が終わった後に…

”ヒュン！”

僅かに空気を振動させ、空間転移（テレポート）してくる小さな影が一つ…

「お疲れ様ですわ。佐天さん」

その人影…小柄な少女は、トンッと小さな音をたてて着地しながら、
ニッコリ微笑む白井黒子に、佐天は軽く手をあげて応え、

「白井さんも、お疲れ様〜♪」

そんな佐天に苦笑しながら黒子は、

「毎度の事ながら、本当に【応援】ご苦労様ですわね〜」

「アハハ♪　まぁ、それが、ウチら【広域機動課】の仕事だかんね〜」

佐天は、気楽に笑うと、

「”ジャッジメント”の慢性的人手不足解消の【切札】…とか呼ばれてるけど、実際には”場当たり的”な【対処療法】止まりだけどさ、それでも…」

ニカッと笑い、

「例え、電話一本で駆け付ける【デリバリー・ピザ】…な～んて陰口叩かれても、何もしないよりはマシっしょ？☆」

佐天瑠威子（さてん・るいこ）が所属する”ジャッジメント”の部署は、【広域機動課】という”特殊課”だ。

どう特殊かと言えば、普通、”ジャッジメント”というのは、各々が籍を置く支部の周辺区域が、”所轄”となる。

平たく言えば、支部ごとに縄張りがあり、支部付きのジャッジメントは、上からの許可を取らない限り、縄張りの外では気軽に”警察活動”の行使は、迂濶にできない仕組みになっていた。

例えば、自由気ままに振る舞ってるように見える黒子でさえも、好き放題やるのは、彼女が籍を置く【第１７７支部】の”所轄管内”だけで、所轄外では上からの活動許可を事前に取り付けるなど、行動に細心の注意を払うのだ。

官僚体質のセクト主義もここに極まれりだが、治安組織というのは

任務の性質上、好む好まざるに関わらず、保守にならねばならない。つまり、何かを守るというのは、簡単に冒険（＝革新）できないという側面もある。

しかし、そんな状況に異を唱える人物が現れた。

どういう人物かは、あえて書かぬが、その時の統括理事会とのやり取りを、ダイジェストで描いてみよう。

《局長》
「だからヨォ、くだらねェ”縄張り争い”なんざァ野良犬にでもくれてやりゃァいいじゃねェか！　ンなモンに構ってる暇は、無ェだろうがよォッ！」

《秘書（ペンダント付）》
「”局長”は、セクト主義に拘っていたら、刻々と変化する状況に、迅速な対処が不可能だって言ってるのなの」

《局長》
「テメェらだって、わかッてんだろうが！？　悪党は、コッチの縄張りに構ってくれやァしねェのさッ！」

《秘書》
「”局長”は、適切で迅速な対処が遅れれば、”ジャッジメント”だけじゃなくて、守るべき市民にまで、出さなくていい犯罪被害者を出すって言ってるの」

《局長》

「…おい、クサレテレパシスト」

《秘書》
「？？？」

《局長》
「テメェ…なにさっきから、勝手なことヌかしてやがんだァッ？」

《秘書》
「”局長”の言葉は、誤解を招きやすいから、だからわたしが意訳、もしくは翻訳してるの♪」

《局長》
「余計な事すんジャねェよッ！　しまいにゃ泣かすゾッ！　コラァッ！」

《秘書》
「どうせなら、一晩中ベッドの上で、ひゃうひゃう啼かせて欲しいのなの♪　もち論、《局長》が望むなら、野外でも、今すぐここでもオ～ケ～なの（はぁとなの☆）」

まぁ、こんなやり取りが有ったとか無かったとか…

《局長》が大分前から【拾い癖（笑）】が有ったりとか、【ＩＳ】にでてきた自称”二人目の男性ＩＳ適合者”にそっくりな声（笑）の《秘書》が、実は初春と同じ中学で、尚且つルームメイトだったりとか、名前は出てないけどフライング出演にも程があるとか、『そもそもＴＶシリーズの【超電磁砲】を視てないと《秘書》が誰だ

かわかんねーよ！』とか、色々とツッコミ所はあるが、とにかく、本人は頑として認めないが、回りの評価では【最強】であるらしい《局長》のごり押しを飲む形で設立されたのが、【所定の管轄を持たず、《西多摩先端研究学園都市》全体が活動エリア】で、他の支部からの応援要請の電話一本で駆け付ける課…

そここそが、佐天の所属する《局長》直轄部隊の【広域機動課（デリバリー・ピザ）】であった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「基本は、ボランティア…実利は乏しく、得られるのは精神的な満足だけというのが、私達（わたくし）、”ジャッジメント”の常ですが…」

黒子は、少し同情的な目で、佐天を見ると、

「それにしても、佐天さん達【広域機動課】は、損な役回りですわね？　せっかく犯人を捕まえても、手柄は全て所轄の支部の物ですしねぇ…」

すると、佐天は「あはは～☆」快活に笑い、

「私達の場合、別に成果とか手柄なんてのは、別に重要じゃないで

すから♪”局長”に言わせれば、『アァン？　ピザ屋の配達人が、ピザ食らッてどうすンだァッ？』って事らしいですしね～☆」

因みに、この《局長》の台詞の後に、秘書から『”局長”は、功績や名誉より大事な物があるって言いたいのなの♪』と、注釈が入ったのは、言うまでもない。

「まぁ、それに結局、面倒な書類処理や手続きは、功績と交換に所轄支部に押しつける形になりますし。それに旨味も無いわけじゃないんですよ？」

佐天がチラッと見るのは、現場近くに駐車しいていた【白いメルセデス・ベンツ・カスタム】だ。

「【西多摩】の中限定ですけど、【暫定自動車免許】とれて、クルマを転がせますからね～♪」

【この世界の日本】では、表向きは義務教育を終えたらすぐに就労しやすいように、本当は様々な理由…特に《巨大過ぎる構造的貿易黒字》を抱えた通商面の要求から、他の大半の先進国に合わせ、１６歳で普通自動車免許が習得できるよう、制度化されている。

しかし、佐天は本来、その年齢にも届いていない。

だが、基本的に【西多摩】は、【街全体が巨大な先端研究実験施設】という特殊な立ち位置の関係上、街の土地全てが誰かしら私有地で、道路網の整備も国費は一円も使わず、私財や企業献金のみが投入された、【統括理事会】が所有名義の”私道”だ。

私有地と私道…細かい話になってしまうが、実は【自動車免許】がいるのは、県道や国道などの”公道”であり、道路が国民の公的共用財産だからこそ”道路交通法（いわゆる、道交法）”が適応され、公的に管理されている。

だが、そのような定義なので、極端な話、牧場主が自分の牧場の敷地の中で車を運転する分には、免許はいらないのだ。

そんな法律の盲点を逆手にとり、

『元々、テメェらだッて【西多摩】は”私有地の集合体”だからって名目と論拠で、勝手に検問作って、国でもねェのに街の出入りを制限したりしてるだろうがァ？　今更、免許の一つでガタガタ抜かすんじゃァねェ！』

という交渉（？）を、《局長》が重ねた結果、はれて【広域機動課】に所属するジャッジメントは、年齢に関係なく【西多摩】限定の”暫定自動車免許”の習得と、自動車の所持が可能になったのだった。

無論、【広域機動課】の名に恥じぬ、”広域（都市全体）で、機動力を生かした迅速な展開”を行う為の”武器”としてだ。

「それにしても、いつ見ても、何というか…無駄に迫力ある車ですわね～」

つい、黒子が白いメルセデス・カスタムに正直過ぎる感想を述べると、

「言わないでくださいよぉ（泣）　私の趣味って訳じゃないんです

からぁ～」

その”白いメルセデス・カスタム”は、ドイツのブラバス社のカスタム・コンプリートカーで、名を【Ｃ－Ｂ６３Ｓ】という。

名前は地味だが、スモール・ベンツ（Ｃ－ｃｌａｓｓ）のボディに５３０馬力を発生させるＶ型８気筒エンジンを詰め込み、最高速は軽々３００ｋｍ／ｈ以上、０→１００ｋｍ／ｈの加速所要時間は４．１５秒という、中々のモンスターっぷりを見せてくれるマシンで、少なくとも【初めて車を買う１０代の女の子】が選ぶ代物じゃあない。

まぁ、それもその筈で、【特定のブランドのＴシャツしか着ない】とか、わりとポリシーやコダワリを持つ《局長》が、実は車もコダワリで、ブラバス社の【カスタム・メルセデス】しか乗らない人らしいのだ。

んで、その《局長》、当時はブラバスのコンプリートカーを二台所有し、更に二台をドイツから取り寄せていたのだが、一台を定期整備に出してる途中、運悪くもう一台の調子が悪くなり、ディーラーへと持ち込んだ。

それで、”代車を無料で出す”と言うディーラーの担当者を無視してる時、たまたまそこにあった【Ｃ－Ｂ６３Ｓ】が目につき、「それでいい。手続きは勝手にやっとけ」と、万券の札束を、１０個ちょい置いて乗って帰ってしまった。

だが、どうやら《局長》様は、

『やッぱ、転がってる”ツルシ”はパワーが足りねェ…つまンねェぞ』

”パワー不足”がお気に召さなかったようで、点検に出してた車が返ってきた途端、

『巫女ォ、やる』

と、たまたま側にいた免許取り立ての佐天に、車のキーを放り投げたらしい。

ちなみに、戻ってきた車は、ブラバス【ブリット】といって、Ｃ－Ｂ６３Ｓと同じ車体に、７３０馬力を発生させるＶ型１２気筒ツインターボ・エンジンを無理矢理押し込み、最高速は楽勝で３５０ｋｍ／ｈ以上…なんて、正真正銘の”モンスター”だった。

気まぐれなくせに、一度言い出したら聞かないのが《局長》だ。

しかも、性格はフリーダムときてる。

こうして、泣く泣く譲渡手続きを終えた佐天は、今度は車に振り回されないように、必死にドライビング・テクニックを磨くしかなかった。

それこそ、学園全体を縦横無尽に走る高速道路でバトったり、裏路地は追跡でかっ飛ばしたりできるようになるまで、半泣きになりながら鍛えた。

「おかげで【３００ｋｍ／ｈでかっ飛ばすブラバス巫女】とか、【スピード狂のブラバス中学生】とか、カーマニアの間で、半ば”都市伝説”じみて掲示板に書かれたりしてるんですよぉ！」

黒子は、ケタケタ笑いながら、

「あら～♪　佐天さんも遂に【セッタばばぁ】や【レベルアッパー】と同じ所に上り詰めたのですわね？」

「や、やめてくださいよぉ～！　ハァ…」

と、佐天は小さく、でも深々と溜め息をついた後…

「私の人生、もう少し平穏な筈だったんだけどなぁ…せめて、掲示板に話題にならない程度には。一体、どこで間違えたんだろ？」

すると、黒子はクスリと笑い、

「あの《白髪頭》に見初められてスカウトされた時点で、何もかもが終わった気がしますわ～」

「そ、そういう身も蓋もない上に、洒落にならない事を言わないでくださいよっ！！」

なんて反論をしていると、マナー・モードにしていた佐天の携帯が、ぶるりと震えた。

佐天は、携帯を開いてメールを確認すると、嬉しそうな顔で、

「白井さん、後はお任せしちゃっていいですか？」

「仕事の呼び出し…では、無さそうですわね？」

「もっちろん、プライベートですよぉ♪　”トモダチ”からの呼び出しです☆」

黒子は、不思議そうな顔で、

「？　初春なら、多分、今日も残業ですわよ？」

黒子の言葉に、佐天はがっくり肩を落とし、

「白井さん…私、いくらなんでも、そこまで人間関係狭くありませんから（涙）」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

そこは、暮れ馴染む街を染める、オレンジ色に輝く夕日がよく似合う場所…

最先端の科学技術が売りの【西多摩】では珍しい、【古い日本】が残る場所…

そう、何の変哲もない小さな神社だ。

去年までは、ここは半ば無人で、定期的に掃除や保守点検等に来るもっと大きな神社の人達や、警備員を除けば、盆や正月にしか人気の無い場所だった。

だけど、ある時からここには住処兼修行の場として、長い黒髪がよく似合う、巫女服姿の少女が、住み着くようになった…

だけど今、境内に腰掛けて、足をぶらぶらさせながら手持ち無沙汰にしてるのは、その巫女服少女ではない。

茶色の髪をショートにして、着ているのは名門”常盤台”の制服だ。

いつしか、この少女にとっても、ここは特別な場所になっていた。

だって、ここで待ってれば…

「ただいま、”ミコト”☆」

「お帰り、”ルイ”♪」

大好きな笑顔と、

”Ｃｈｕ♪”

暖かいキスが、来てくれるのだから…

第8話：とある巫女（？）のデリバリー・ピザ（後書き）

皆様、ご愛読ありがとうございましたm（__）m

今日も日付変更前ギリギリのアップで、読んでくれる読者様がいらっしゃるか心配な暮灘です（^^；？

「なんか、本日も纏めるのに手間取っていたと、ミサカはミサカは暴露しちゃったりして♪」

うん（^^；？

詰め込みたい話の調整がねぇ～…

「それに、本気でフライング出演にも程があると、ミサカはミサカは指摘します☆」

《局長》は、言うまでもなく【ベクトル使い】の人だし、《秘書》の娘は、誰か皆様は分かったでしょうか？

「勿論、ミサカはミサカはパーフェクトにわかっちゃったりしてぇ～♪」

少し人当たりの良くなった一方さんの雰囲気とか、果たして上手く出てたでしょうか？（^^；？

こんな時間のアップゆえ、果たしてどれだけ読んで頂ける読者様がいらっしゃるか、激しく不安ですが（汗）、また次回、お会いでき

る事を願いつつ…

第9話：とあるバーテンのアイテム・ボックス（前書き）

皆様、こんにちはー☆

【バカ努力】に煮詰まり、それで書き始めた【西多摩】なのに、今度は作品の方向性に迷った暮灘です（＾＾；？

でも、あれだけ書き直したのに、苦しいって感覚は不思議と無かったんですよね～（＾＿＾；）？

さてさて、今回の読みどころは…

前半パートは、巫女魔術師と超電磁砲の二人舞台（笑）ですね～♪

爽やかな百合の花畑と思いきや、この先の”事件”の含みと仕込み（笑）があったり、あるいは《局長》の意外（？）な一面が垣間見えたりします。

それで少しだけ、【西多摩】が、正史（原作）とまったく違う部分が有ることを示唆してます。

そして、後半は…

なんというか、フライング出演の嵐です（＾＿＾；）？

まぁ、それは本編を読んで頂くとして、上条さんとてーとくんのやり取りが、書いてて楽しい楽しい（；＾｜＾Ａ？

更に、上条さんが原作ばりのフラグ・ブレイクと、ショウ・ザ・フラッグ（笑）を魅せます☆

どんなフラグをへし折り、立てたのかどうか読んでみてください♪

本日（６／１７）付けの活動報告にも書きましたが、この第９話で二次創作ジャンルのタグを、【とある魔術の禁書目録】から【とある魔術の禁書目録　とある科学の超電磁砲】に変更します。

それでも変わらずご愛読戴けたら、幸いですｍ（｜｜）ｍ

第9話：とあるバーテンのアイテム・ボックス

【西多摩先端研究学園都市】
第7学区、街外れ
【柊神社】境内

夜の帳が降りる、少し前の時間…
風が、ほんのり冷たくなってきた頃…

「ちょっと、まだ季節的に早かったかな？」
と、某有名アイスクリーム・ショップのロゴ入りカップに入ったアイス（クッキー&チーズケーキ）を口に入れながら、苦笑する佐天に、
「そんなことないよ～。美味しいし、それにせっかく、”ルイ”のお土産だしね♪」
と、ペタッと佐天の横に座り、上機嫌に”トリプル・ベリー”フレーバーのアイスを舐める命（みこと）。
「へへっ♪　そんな事を言われたら、佐天サンは照れちまいますよ

☆」

ちょっと頭をかく佐天に命は、クスクス笑い、

「”ルイ”のも美味しそうだね～♪」

「食べる？　あ～ん♪」

と、委細承知という感じでスプーンに自分のフレーバーを乗っけて差し出す佐天に、それを嬉しそうに舐める命。

「私からもご返杯ね？　あ～ん」

「はいはい。あ～ん」

二人の間に流れる空気は、アイスよりもなお甘そうだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「でもさ、なんか最近、出動回数増えてない？」

アイスを食べ終えると、命はちょっと心配そうに、

「そうだねぇ～。それも高レベルの【真性の悪党】ってより、【能力に酔って、はしゃいでる小物】って感じのが、増えてる気がするんよ」

首を捻る佐天に、

「レベルが上がって有頂天…って奴かな？」

（と、思うけどね…それにしちゃあ、ちょっと数が多いような？）

「ねぇ、”ミコト”…一時期に群発的に【能力者】のレベルが上がるなんて、有り得るかな？　それも、【バンク】にアップデート・データが上がらないぐらい急に」

「ないない！　私自身がレベル１から引き上がったから分かるけど、レベルアップってペースや上がり方も、完全に個人差よ？　それが一斉上がるようなカリキュラムを構築できるなら、もっと能力開発だって効率的にできるって！」

軽く肩を落とす佐天だったが、

「それもそっかぁ～。最近、能力者がらみの事件が増えてるのと、その犯人が、【バンク】のデータと実際に使われる能力が食い違う～…なんてのが、頻発しててねぇ～」

「それって、【バンク】の登録情報に誤差が出てるってこと？」

少し驚いた顔をする命だったが、

「そういうのと、”感触”が、ちょっと違うんだよね～。イメージ的には、バンクにデータ登録された後に、急に力が盛り上がったというか…」

すると、ふと脳裏を掠めたのは、先ほどの黒子との会話…

『あら～♪　佐天さんも遂にセッタばばぁや【レベルアッパー】と同じ所に上り詰めたのですわね？』

（まさかね…）

「ん？　”ルイ”、どうしたの？　急に難しい顔して？」

「いや…ちょっと、【都市伝説】を思い出してたのよ」

「【都市伝説】？」

佐天は頷くと、

「うん。”使うだけでレベルが上がる”って噂の【レベルアッパー】ってアイテムが、存在してるって噂の、ね…」

命は怪訝な顔をして、

「そんな話、初めて聞いたけど…でも、それって眉唾じゃない？そんなに画期的な便利なアイテムが有るなら、成果主義の【西多摩】なら、とっくに発表されてる方が自然じゃない？　第一、そんな物

が実用化されてるなら、散々やってる能力開発が、いきなり無意味になるわよ？」

命の大変にごもっともな意見に、

「だよね～。有り得るとしたら、どこかの研究所がやってる非合法の…例えば、まだ実用に問題のある投薬人体実験かなんかの一環で、サンプル・データを得る為に、能力（ちから）を渇望する伸び悩む低レベル能力者に、無作為にバラ撒いて…ってセンはないかな？」

佐天の言葉に、命は少し考える顔で、

「【レベルアッパー】は、その禁止薬物か未認可薬物の流布が、形を変えて広まった物か…有り得ない話じゃないと思うわよ？」

命の悪く無さげな感触に、佐天は頷いて小さくガッツポーズを取り、

「よっしゃ！　だったら、今度犯人をふん捕まえたら、”局長”に許可を貰って、佐天サンのスペシャルな尋問術式を…って、ゴメン！　なんか、仕事の話ばっかになっちゃって！」

急に謝る佐天に、命は苦笑して、

「いいっていいって！　”ルイ”が、忙しいのは分かってる事だし…」

と、ふと何かを思い出したように、

「あの上司じゃ、苦労するの確定のような気がするしね（汗）」

どうやら、命がげんなりした表情で思い出したのは、直接会った事は無いけど、一度だけ遠目で見てしまった【一方的かつ圧倒的な力】を引き起こした、”白髪頭で赤い瞳の青年”らしい。

「でも、”局長”は見た目がああだし、言葉使いもアレだから、誤解されまくりだけど、”ミコト”が考えてるような苦労はしてないよ？　確かに気分屋で我が侭なとこもあるけど、私達【広域機動課（デリバリー・ビザ）】の中じゃ、”根っこは物凄い善人で、かなり愉快な人”って認識で一致してるしね～♪」

その佐天の台詞を聞いた途端、命はピシッと固まり、

「善人…？　愉快…？　【第一位】には、一番、似合わない形容詞のような気がするんだけど…」

しかし、佐天はチッチッチッと指を振り、

「とぉ～ころがギッチョン！　既に実例があるのだよ♪”局長”の取り巻きに、幼い感じの女の子が”三人”いるんだけどさぁ…」

佐天は、ニカッと笑うと、

「その三人とも、元は【チャイルド・エラー】の子で、”局長”に拾われて、ずっと育ててもらってるみたいなんだ」

「えっ…？　マヂで？」

「マヂマヂ！　私も詳しくは知らないけど…その内の二人は、【”

局長”の能力を人為的に再現しようとした違法実験】の被験者の生き残りで、”局長”がキレて研究所を叩き潰した後に、引き取ったらしいんだ」

命は、心底驚いた顔で、

「それって、スッゴい美談じゃない！　あの人、色々噂は聞くけど、その話は初耳よ！？」

食い付く命に、佐天は言葉を選びながら、

「”局長”、美談とか吹聴したりするの嫌いだかんね～。それにまぁ、これは推測だけど、その【被験者の二人】に配慮してるんじゃないかな？　事件が明るみに出れば当然、二人の素性も割れるし、ね？」

「ふ～ん…人は、見掛けによらないって本当だったんだぁ…」

しみじみ言う命に、佐天は思わず吹き出した。

（まぁでも、”局長”が【広域機動課（デリバリー・ピザ）】を作ろうとしたきっかけって、案外…）

『あの二人みたいな”モルモットにされる子”を、もう産み出させない為じゃないのかな…』と、佐天は胸の内で、【窒素を矛と盾に使う二人の娘】を思い浮かべていた…

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ＢＡＲ【Ｆａｉｒｙ　Ｔａｌｅｓ】

刀磨ｓｉｄｅ－

「ちーす」

俺こと上条刀磨（かみじょう・とうま）が、気楽な調子で、【おとぎ話】のドアを潜ると…

「いらっしゃい♪」

と、出迎えてくれたのは、この間（第１話）じゃいなかった、真っ赤で派手なドレスを着た金髪のホステス（？）さんだ。

（って、ちょっと待て）

上手く化粧で誤魔化してるつもりだろうけど…

（この娘って、どう見ても１４～１５歳ぐらいだろ？）

武偵の洞察力を、見くびってもらっては困りますってもんだ。

（いや、それより…）

「俺にマインド系の能力は、一切効かないぜ？　ご苦労様だな、”お嬢ちゃん”」

「むぅ～」

そんな風にむくれても、結果は変わりませんて。

というか、拗ねると歳相応に見えますぜ？

俺は、ドレスっ娘の金髪を一撫でしてスツールに座ると、カウンターに座る男にしては、長めの髪の長身イケメンに、

「”垣根”、悪いがなんか適当に食えるモン作ってくんね？」

するとイケメン、【垣根帝徳（かきね・ていとく）】は、面倒そうな顔で、

「ヲイヲイ…ウチは、ファミレスじゃねぇぞ？　飯が目当てなら、ヨソに行け」

ほ～う、そういう態度に来ますか…

「んじゃあ、アルコールレスのビールを。銘柄は、バーテンにお任

せで」

垣根は、嫌そうな顔をすると、

「アルコール抜きのビールなんざ、ただの【苦い麦茶】じゃねぇか…」

「でも、置いてるだろ？　生憎、今日も上条さんは車でね」

「イヤな客だな…直ぐに出来んのは、【カルボナーラ】ぐらいだぞ？」

カリカリベーコンと黒胡椒のクリーミー・スパゲティかぁ～。

「上等！　大盛りで頼むぜ～♪」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「へぇ～っ…使うだけでレベルが上がる【（幻想御手）レベルアッパー】ねぇ～」

俺は、スパゲティをパクつきながら聞くと、

「【俺達（暗部）】には、まだ捜索だの調査だのって話は来てねぇが…まぁ、ケッタイなモンが流行ってるってこったな」

垣根はグラスを磨きながら、大して興味も無さそうに答えた。

「俺は、関わりそうな予感がバリするんだよなぁ～」

ついぼやいてしまう上条さんだったが、

「”表仕事”が【武偵】ってのも、難儀なもんだねぇ。まっ、俺にしてみりゃザマァなんだが」

あのなぁ…

「お前、本当にいい性格してんよな！」

「お褒めに預かり光栄至極ってな」

ニヤリッと笑う垣根に、何と言い返してやろうかと考えると…

（ん…？）

扉が開く気配か？

「あ～、珍しい。お客さんがいる…」

なんか、間延びした声を上げたのは、店に入ってきたピンクのジャージを着た、おかっぱ頭の、何となくおっとりしてそうな中学生ぐ

らいの女の子だ。

「おお～っ♪　ここに【身内】や【同業】以外のお客が入ってるのなんて、メガッさレアじゃない♪」

と、はしゃいだ声なのは、金髪の小学校高学年ぐらいの可愛らしい少女。

「まったく、何を騒いでるのよ？　確かにここは、普通ならいつ潰れてもおかしくないくらい、閑散とした客入りの店だけどね」

と、締め括るのはウェーブがかった茶髪がよく似合う、ゴージャス系の美女だった。

（大体、俺と同年代ぐらいかな？）

「お前らなぁ…客がいねぇいねぇウルセぇよっ！！」

「垣根、知り合いか？」

「手下だ手下」

と、ぞんざいに垣根は言い切るが、

「あァンっ！？　誰が、いつ、どこで”帝徳”の手下になったってのよッ！？」

と、凄むゴージャス系美女。

だが、垣根は”暖簾に腕押し、糠に釘”っぽく軽々と受け流し、

「【麦野静里（むぎの・しずり）】が、俺に２０回負けて、俺がリーダーを務める事を認めた瞬間からだ」

「うっ…」

リアクションから見るに、どうやら事実らしいなっと。

それと、ゴージャス美女は、”麦野”さんって言うのか…

（ん～…）

だけど、上条さんが気になるのは、垣根とじゃれてる麦野さんじゃないんだよねぇ…

「あの…何か？」

俺の視線に気付いたのか、ピンク・ジャージの娘は、不思議そうに俺を見返す。

なら、はっきり言った方が良いかな？

「君、もしかして”能力を無理矢理ブーストする薬物”とか、常用してない？」

その瞬間、店の空気が凍り付いたのだった…

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「…っ！」

麦野さんは、何かアクションを起こそうとしてたようだけど、垣根に止められていた。

「あ、あのっ！　その…（汗）」

「やっぱりか…」

ジャージっ娘のリアクションに俺は、つい溜め息を突いてしまう。

「…上条、お前、”見える”のか？」

垣根は、警戒を微妙に滲ませながら聞いてくるが、

「いや、【不自然さ】を”感じる”だけだ」

武偵や【本業】をこなす内に感じるようになった、この【感覚】は、我ながら信用できる。

俺は意を決して、

「えっと、君…」

「”裡后”…”滝壷裡后（たきつぼ・りこう）”です」

ジャージっ娘改め、滝壷さんに、

「俺は”上条刀磨”。え～と…突然だけどさ、君…滝壷さんに、触れて良いかな？」

「ちょっ！？　アンタ、何を言って…」

噛みついてきたのは、金髪ミニ少女だったけど、

「？　構いませんが？」

俺は確認を取ると、そっと滝壷さんの胸に触れた。

そして、

（これか…？）

”キュイン！”

独特の【異能を殺した】感覚が、指先に残る…

「もう、大丈夫だ…君を蝕んでいた【悪夢（げんそう）】は、」

「俺が”殺した”…！」

第9話：とあるバーテンのアイテム・ボックス（後書き）

皆様、ご愛読ありがとうございましたm（__）m

創作ジャンルの変更に、激しく不安な暮灘です（^^；？

「というより、むしろ【新訳＝アイテム＝浜面ハーレム】って認識の読者様のリアクションを心配した方がいいと、ミサカはミサカは指摘しちゃいます（汗）」

あ～、そりゃ上条さんとてーとくんが、よってたかった【幻想（浜面ハーレム・フラグ）】をへし折ってるもんなぁ～（^^；？

でも、これには海より深い事情があって…

「海より深い事情？」

ぶっちゃけ、【西多摩】は、そんな長い話にする予定が無いから、ぶっちゃけ浜面を主人公に昇格させる余裕ないッス（；^_^A？

「いぇ～い♪　景気のいいぶっちゃけっぷりに、ミサカはミサカはむしろ清々しさを覚えちゃったりして♪」

さてさて、今回の裏の主人公は、原作の後半を盛り上げた【アイテム】の面々だったのですが、いかがだったでしょうか？（^^；？

実は、フライング未公開ネタをあとがきを読んで頂いた読者様にサ

ービスサービス～♪すると、原作と因果律が違う【この世界】では、最初から原作通りの【スクール】も【アイテム】も存在しません。

”表世界”で《局長》が、【高レベル能力者（戦力）の集中投入による効果と妥当性】を証明してしまったので、”裏社会（暗部）”も同じような動きで、組織の統廃合による再編が行われた…なんて動きがあります。

だから、アイテムの面々も、原作ほど【壊れてる】訳じゃないんですね～♪

というか、垣根に２０回挑んだ麦野も凄い根性だけど、それに付き合う垣根も違う意味で凄い（笑）

そして、【一方の光源氏計画（笑）】は…？

とりあえず、早々とレベル５の上位４人が出てきましたが、果たしてどうなる事やら（；＾＿＾Ａ？

それでは、またお会いできる事を祈りつつ（＿＿）

ご意見ご感想は、本当に創作の励みになります♪

いつでもお待ちしております（＿＿）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9006t/

スピンオフSS《とある西多摩の学園都市》

2011年6月19日16時10分発行